金正日略伝

朝鮮・平壌
チュチェ87(1998)

金正日略伝

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ87(1998)

『金正日略伝』の刊行にさいして

金正日（キムジョンイル）朝鮮労働党総書記は、革命の道を踏み出した当初から朝鮮人民の偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席の偉業の完成を畢生（ひっせい）の使命とし、党と革命、祖国と人民の前に不滅の功績を積みあげた、チュチェの革命偉業の忠実な継承者、革命武力の最高司令官であり、朝鮮労働党と朝鮮人民の偉大な指導者である。

金正日将軍が朝鮮労働党を導いてきた過程は、内外の革命情勢が複雑をきわめ、党と革命の前に困難かつ膨大な課題が提起された苦難にみちた試練の時期であった。世界の帝国主義連合勢力との長期にわたる対峙のもとで、社会主義か資本主義かという熾烈な階級闘争がくりひろげられていた時期に、金正日将軍は金日成主席の近しい同志、忠実な補佐役として革命の旗、社会主義の旗を守り、禍を福に、逆境を順境にかえて革命を高揚と勝利へと導いた。

金正日将軍は、エネルギッシュな思想・理論活動によって金日成主席の革命思想をチュチェの思想、理論、方法として体系化して、自主時代の革命的旗じるしとして輝かし、革命と建設における焦眉の問題を理論的に解明

し、朝鮮革命の強力な思想的・理論的武器をもたらした。
　金正日将軍は、労働者階級の党は領袖の党となるべきであるという思想を示し、それを実現することにより、党建設と党活動、党の事業全般に根本的な転換をもたらし、金日成主席の創立した朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党に発展させ、党の戦闘力と指導力を強化した。
　金正日将軍は、革命武力を統率して朝鮮人民軍を、党と社会主義偉業を銃をもって守る党の軍隊、領袖の軍隊、無敵の革命的武力に強化し、朝鮮を全人民が武装し全国が要塞化された難攻不落のとりでにかえた。
　金正日将軍は全社会をチュチェ思想化すべく新たな路線を示し、思想、技術、文化の 3 大革命を推進して、革命隊伍の一心団結を不敗のものにし、経済・文化建設に一大転換と開花の新しい歴史を開いた。
　金正日将軍はつねに人民と苦楽をともにし、真の人民的政治、仁徳政治を実施して、全人民を党と領袖のまわりに運命共同体として結合した革命的大家庭にかえ、すべての朝鮮人民に誇らしく幸せな生活をさせるため深い配慮をめぐらしている。
　このように金正日将軍は 30 余星霜にわたる不眠不休の革命活動によって、朝鮮に金日成民族の隆盛と繁栄の新時代を開いた。
　本社編集部は、金正日将軍の活動史を紹介するために本書を刊行することにした。

目　　次

1

（1942 ・ 2～1964 ・ 3）

金正日（キムジョンイル）将軍は、朝鮮革命と世界革命の発展に転換がもたらされていた歴史的な時期であるチュチェ 31（1942）年 2 月 16 日、白頭山（ペクトウサン）密営[1]（両江道（リャンガンド）三池淵郡（サムジヨン））で生まれた。

金正日将軍の家庭は類まれな愛国的で革命的な家庭である。

父の金日成（キムイルソン）は、朝鮮民族の偉大な父であり、社会主義朝鮮の始祖であり、朝鮮人民の領袖であった。金日成主席は朝鮮革命と世界革命、時代と人類の前に多大の功績を残した思想家・理論家、政治家であり、軍事戦略家であった。

母の金正淑（キムジョンスク）は、金日成主席の指導のもとに、祖国の解放と人民の自由と幸福をめざすたたかいに全生涯をささげた共産主義的革命闘士であった。

祖父の金亨稷（キムヒョンジク）は、反日民族解放運動の指導者であり、朝鮮における民族主義運動から共産主義運動への方向転換の先駆者であった。

祖母の康盤石（カンバンソク）、従祖父の金亨権（キムヒョングォン）、叔父の金哲柱（キムチョルチュ）、外伯父、外叔父の金基俊（キムギジュン）、金基松（キムギソン）も祖国解放偉業に身命をなげうった革命闘士であった。

このように代をついで祖国と人民のためにたたかった愛国的で革命的な家系は、金正日将軍が人民の指導者としての品格をそなえて成長する土壌となった。

金正日将軍は幼少のころから人並外れて聡明かつ英邁であった。物事にたいする鋭い観察力と明晰な分析力、非凡な洞察力、すべての問題を革新的な眼識で見る創造的思考力などを身につけていた。また、胆力と雄志をもって、なにごとであれ取り組みが大がかりで、いかに困難な仕事でもいったんやり始めると自力で最後までやりとげる強靭な気質をそなえていた。そして、熱い人間愛と広い度量、人情味をもち、つねにおおらかな態度で人びとに接した。

金正日将軍のすぐれた天稟（てんぴん）は、両親の薫育（くんいく）によって、未来の革命家、指導者の品格と資質として培われた。

祖父の「志遠[2]」の遠大な志と、代をついで祖国と革命に身をささげてきた万景台（マンギョンデ）一家、朝鮮の愛国烈士、抗日革命烈士、児童団員についての父の話は、少年金正日の胸に革命精神を植えつけた。とくに、父の金日成主席の不眠不休の革命活動を献身的に補佐する母の姿は、父への孝心を領袖への忠誠に昇華させた。実に母の金正淑

は金日成主席の革命偉業を継承していく基礎をきずいた偉大な革命の母であった。

金正日将軍は、抗日革命闘争と新しい祖国の建設、祖国解放戦争（朝鮮戦争）の炎のなかで成長し、体験と実践活動を通じて並外れた資質と品性を培っていった。解放後、新祖国建設のために不休の労苦をいとわない主席の活動を目撃し、祖国解放戦争の時期に朝鮮人民軍最高司令部で主席と起居をともにして、歴史に特記すべき数多くの出来事を体験した。とくに戦争の時期、金日成主席の卓越した指導力と強靭な意志、非凡な軍事的英知、高邁な徳性から大きな感銘をうけ、父の金日成がいてこそ祖国と人民の運命が開かれ、戦争も勝利するという信念をかたくした。

金正日将軍は、このような忠誠の信念と意志を自ら創作した歌『祖国のふところ[3]』（1952 年）でうたいあげている。

金正日将軍はこのように少年時代にすでに、金日成主席への忠実性を気高い高さで体現した。それはのちのすべての思想・理論活動と実践活動の礎石となった。

金正日将軍は 1950 年 9 月から 60 年 8 月の期間に普通教育課程を終えた。

金正日将軍は少年時代に、同級生たちの先頭に立って金日成主席に学ぶ活動を精力的に展開した。金正日将軍

は人民学校時代、クラスの少年団員たちによる「金日成将軍の略伝研究サークル」を組織した。略伝研究サークルの目的は、金日成主席の革命活動史の学習を通して、その偉大さを深く認識し、朝鮮革命の柱として準備するところにあった。

「金日成将軍の略伝研究サークル」は、きびしい戦争の時期に育ちゆく新しい世代を金日成主席に忠実な息子、娘として準備させるうえで大きな役割を果たし、サークル活動の経験は後日、金日成主席に学ぶ活動を深化させる下地となった。

1953 年 7 月、祖国解放戦争は朝鮮人民の勝利に終わった。戦後、平壌(ピョンヤン)第 4 人民学校を卒業し、平壌第 1 中学校に入学した金正日将軍は、多方面にわたる知識の習得に努めた。

金正日将軍は、抗日武装闘争の戦跡地である普天堡(ポチョンボ)と三池淵一帯への踏査行軍を発起し、その最初の隊伍を率いた。これはその後、全国的に展開された白頭山一帯の革命戦跡地踏査行軍の道を切り開いた意義深い踏査行軍であった。

金正日将軍は「朝鮮のために学ぼう!」というスローガンのもとに、生徒たちの主体性の確立[4]に努めた。1957 年 9 月 1 日、平壌第 1 中学校高級班(のちに平壌南山(ナムサン)

高級中学校となる）に進学した金正日将軍は、当時、歴史的にひきつがれ革命に弊害を及ぼし、生徒たちにもみられた事大主義、教条主義の思想的毒素と思考方式を一掃することに努めた。

金正日将軍は朝鮮労働党の政策と革命伝統を深く研究し、朝鮮の歴史と文化、地理、良風美俗などを熱心に学ぶ一方、外国のものを朝鮮の現実に役立てるように消化していった。

また、学友とともに工場、農村に出向き、学校の生産実習室で自動車やモーターの運転と修理技術の習得に努めた。この模範は、学友たちに自国のものを大事にし、輝かしていく観点を確立させるのに役立った。

金正日将軍は学生時代、民青〔5〕活動に積極的に参加した。1957 年 9 月からは学校の民青委員会副委員長（委員長は教員）を務めた。当時、朝鮮では生産関係の社会主義的改造が完成段階に入り、チョンリマ（千里馬）の大進軍〔6〕が始まって人びとの意識にも一大転換がもたらされていた。しかし、民青活動は反党反革命分派分子の策動に災いされて形式主義的な古い枠から脱皮できず、民青組織は思想教育団体としての性格と新たな環境に即して活動を正しく展開していなかった。金正日将軍はこうした実態を把握し、金日成主席の青年運動思想の貫徹に深

い関心を払った。

金正日将軍は、学校の民青組織の基本任務は民青員を党と領袖に忠実な革命家に、知識と能力のある社会主義建設者に育成することであるとし、民青員の思想教育を強化し、民青団体が同盟生活、学習と少年団活動にたいする指導を正しくおこない、すべての活動を青年の特性に即して清新でスケールが大きく展開するようにした。

金正日将軍は思想教育を千篇一律式ではなく、青年の特性に即して清新かつ多様におこなった。1958 年 4 月、学友とともに李寿福（リスボク）英雄〔7〕の母校と故郷を見学し、自分の領袖、祖国と人民への李寿福英雄の忠誠心と熱愛の精神を青年に学びとらせた。また、青年学生にたいする思想教育を、否定的傾向を暴露、批判する方法から、模範的事実を積極的に探し出して広く宣伝し一般化する方法に変えた。

金正日将軍は、民青組織に同盟員の組織生活を正しく指導させることに深い関心を払った。

金正日将軍は、民青員が学習に励むように指導するのが民青組織の重要な任務であり、同盟生活指導の基本的内容であるとし、学科コンテスト、課目別学科討論会、文芸作品読書発表会などを催した。

金正日将軍は学習にすべての精力を傾けるべきであるとして、その模範を示した。早くも中学校時代に「情

熱、それは偉大な創造の源である」として、多方面にわたる知識の習得に並外れた精力をそそいだ金正日将軍は、高級中学校時代にも学課目別の教材以外に金日成主席の著作とマルクス・レーニン主義の書籍を耽読し、機械工学、農学、畜産学などの専門技術分野、社会科学と文学・芸術分野の図書も読破した。その学究的な努力はきわめて幅広く深奥なものであった。

　金正日将軍の模範と指導により、学生たちの学習熱はいちだんと高まった。

　金正日将軍は、民青組織が民青員のあいだで自覚的な組織生活気風を確立することにも力を入れた。民青組織が同盟員に任務を分担し、その遂行状況を掌握して積極的に援助する一方、すべての同盟員が批判にたいする正しい観点に立って、批判と自己批判に積極的に参加するように導いた。

　金正日将軍は少年団活動にも深い関心を払い、民青が少年団活動を責任をもって指導する活動体系を確立した。この体系では、高学年の経験豊かな民青員が少年団分団指導員の担任教員を助けて分団を指導する補助分団指導員となる。かれらは学校民青委員会の指導のもとに、少年団にたいする民青の指導を保障するうえで重要な役割を果たした。

　金正日将軍の精力的な活動によって、学校の民青活

動は従来の古い枠から脱皮し、清新で活気あるものになった。この過程で金正日将軍のすぐれた組織的手腕が示された。

金正日将軍は学友の先頭に立って社会主義建設に積極的に参加した。

金日成主席は、1958 年 3 月に開かれた全国青年社会主義建設者大会で、青年は党の指導のもとに明るい新時代、新しい社会主義時代を開くべきであると述べ、すべての青年が自分の情熱と知恵と能力を社会主義建設にささげることを呼びかけた。

金正日将軍はそのとき、平壌市の 2 万世帯の住宅建設に学友たちとともに参加し、かれらの革命的熱意を奮い起こし、技術革新運動を展開して基準速度をはるかにうわまわる集団的革新を起こすのに寄与した。またその後、大同（テドン）江護岸工事と平壌学生少年宮殿の建設にも参加して、巧みな組織・政治活動と実践的模範によって学生青年を勤労の偉勲へと立ち上がらせた。

金正日将軍は 1960 年 8 月、高級中学校の課程を終えた。

金正日将軍は 1960 年 9 月 1 日、金日成総合大学経済学部政治経済学科に入学した。将軍はその日、大学時代にチュチェ偉業を継承する準備をととのえることを決意

した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「…いざ最高学府に入ってみると、金日成同志の気高い志を体して革命の未来を担って立たなければならないという決意がいっそうかたまります。

わたしは大学時代を、金日成同志の革命思想を深く体得し、朝鮮革命の担い手としての準備をととのえる意義深い時代にしたいと思います」

金正日将軍はその日、大学を見おろす龍南（リョンナム）山に登り、金日成主席の志を体してチュチェの革命偉業を継承し完成する構想を『朝鮮を輝かさん[8]』と題する一篇の詩にしたためた。

遠大な志をもって大学に入学した金正日将軍は、金日成主席の革命思想と革命理論、指導方法を体得し、自然と社会についての広く深い知識を習得するため精力を傾けた。

初級・高級中学校の時期に金日成主席の著作と教えを系統的に学習した金正日将軍は、『金日成選集』をはじめ金日成主席の著作を再び全面的に研究し、とくに革命と建設で提起されるすべての問題を国の具体的な実情にてらして独創的に解決する金日成主席の思想と理論を体得した。また、人類が残した進歩的な思想的・理論的遺産と科学・文化遺産、とりわけマルクス・レーニン主

義を主体的立場に立って幅広く深く研究した。

大学時代の初期に『共産党宣言』『資本論』『資本主義の最高段階としての帝国主義』『国家と革命』などの古典を読破し、行間やスペースに、「われわれの時代にはもはや適さない理論」、「輪郭を描くにとどまり、さらに展開されていない」などと、古典の限界や命題、定義にたいする独自の見解を書き入れていった。

また、専攻の政治経済学のみならず、哲学、軍事学など各分野にわたる多方面の知識を研さんした。

金正日将軍は科学探究に力を入れる一方、在学期間に各種の活動を展開した。

まず、学生の革命的領袖観の確立に深い関心を払った。そして、談話や学科討論を通じて、領袖は革命の最高頭脳であり、統一団結の中心、革命の最高指導者であることを原理的に解明し、革命と建設に功績を残した金日成主席の偉大さを明らかにした。

金正日将軍は当時、学生の一つの弊風となっていた古典崇拝と教条的な学習態度を克服し、革命と建設で提起される諸問題を金日成主席の革命思想を尺度にして考察し、革命の利益の立場で解決する観点を確立するように導いた。

金正日将軍は学友たちに金日成主席の著作を深く学

習することを強調し、在学の最初の2年間は『金日成選集』に収録されたすべての著作を研究して抜粋し、後半の2年間はそれをさらに掘り下げて研究するための学年別学習計画と目標を立てるようアドバイスもした。

　金正日将軍は、学生の革命伝統教育を強化し、党と革命の歴史的根源を深く体得し、階級的教育と反修正主義教育に大きな力を入れ、労働者階級的立場と革命的原則を確立するように導いた。

　金正日将軍はまた、学生に理論と実践を結びつけて学ばせることにも深い関心を払った。

　平壌紡織機械工場（当時は平壌紡織機械製作所）での生産実習、平壌市臥山(ワサン)洞――龍城(リョンソン)間道路拡張工事などに参加して大学実習生、大学生突撃隊員としての任務を遂行した。平壌紡織機械工場での生産実習期間には、第26号旋盤を操作して工場の労働者たちを模範機械創造運動に立ち上がらせた。これが現在、大衆的運動になっている「26号旋盤に学ぶ忠誠の模範機械創造運動」のきっかけとなった。

　金正日将軍は、1961年7月22日、朝鮮労働党に入党した。そして、党員としての高い自覚と、党と革命にたいする重大な使命感をもって大学の生活に誠実に参加した。

　金正日将軍は大学時代、金日成主席の指導を積極的

に補佐した。

平安（ピョンアン）北道と黄海（ファンヘ）南北道、両江道と咸鏡（ハムギョン）南道を現地指導する金日成主席に同行し、各級党組織が主席の教えを実行することを党活動の中心としていくように導いた。これとともに、チョンサンリ（青山里）精神、チョンサンリ方法[9]を具現し、すべての活動を対人活動[10]、政治活動に転換するように強調した。

また、黄海製鉄所、南浦（ナムポ）製錬所にたいする金日成主席の現地指導に同行し、人民経済の技術改造を成功裏に実現する方途を示した。農村技術革命にも深い関心を払った金正日将軍は、金日成主席に同行して黄海南道をはじめ各地の数多くの農業協同組合を視察し、骨のおれる農作業を機械化、化学化し、先進営農方法を積極的に導入するよう強調した。

金正日将軍は地方経済を発展させ、人民生活を画期的に向上させるための金日成主席の地方の党および経済活動家昌城（チャンソン）連席会議の準備と指導を現地で積極的に補佐し、その後には両江道豊山（プンサン）郡と咸鏡南道徳城（トクソン）郡をはじめ山間部の郡を訪れ、昌城郡の模範的な経験[11]を積極的に取り入れるようはからった。

金正日将軍は主体的な社会主義文学・芸術建設にかんする金日成主席の構想を実現するため、抗日革命闘争期、金日成主席が創作した作品を発掘して再現し、自主

時代に合った歌劇と演劇を創作し、労働者階級の領袖を芸術的に形象化する課題を示した。

　また、テレビ放送創設についての金日成主席の構想にもとづき、テレビ放送設備の製作と送受信テストなどの準備活動を指導し、テレビ放送を開始できるよう積極的に援助した。

　金正日将軍の大学時代の補佐活動は、金日成主席の指導を実現するのに大きく寄与した。

　金正日将軍は大学教育の内容の改善に深い関心を払った。

　学科論文『3 国統一問題の再検討について』のなかで、従来の通説であった「新羅による 3 国統一論」と「新羅正統説」を全面的に批判し、かつて事大主義史家によって歪曲された朝鮮史を主体的立場から体系化すべきであるという見解を示した。これは卓越した歴史解釈であった。

　金正日将軍は、民族を形成する基本的表徴は血筋、言語、地域の共通性であり、そのうちでも血筋と言語の共通性は民族を特徴づけるもっとも重要な表徴であることを明らかにした。そして、朝鮮民族は、一部の学者が主張するように日本帝国主義植民地支配時期や解放後に形成されたのではなく、5，000 年の悠久な歴史をもつ

英知に富んだ民族であり、地域的に離れて住む海外同胞も同じ朝鮮民族であると述べた。

金正日将軍は、金日成主席の革命思想の偉大さと独創性、その真理性を正しく解明することに大きな関心を向けた。そして学科討論と学友との談話の過程で、金日成主席によるチュチェ思想の創始によって世界観の原理が根本的に再定立され、哲学、経済理論、政治理論をはじめ革命と建設にかんする理論全般が新しい境地に至ったことを論証した。

金正日将軍は大学時代、思想・理論活動も積極的に展開した。

『現代修正主義の発生について』などの談話で、現代修正主義が発生した根源と反動的本質、危険性について分析した。

金正日将軍は、現代修正主義の弊害は、革命と建設における労働者階級の党の指導を否認し、アメリカ帝国主義の核脅威政策に屈服し、帝国主義にたいする幻想をまき散らして反帝闘争を放棄し、社会主義諸国と国際共産主義運動の統一と団結を破壊することにあると指摘した。

金正日将軍は労働者階級の革命思想をさらに発展させた。

『思想・意識の決定的役割について』（1962 年 12 月）などの諸論文や談話では、チュチェの哲学的世界観、社

会・歴史観と革命理論を展開した。

金正日将軍は、社会・歴史の発展過程を自然史的過程としてとらえる唯物史観の不十分さを示し、社会・歴史はその自主的要求を実現させる人民大衆の創造的闘争によって変化、発展するというチュチェの社会・歴史観の根本的原理を明らかにした。また、社会的存在が社会的意識を規定するからといって、思想・意識が現実より立ち後れるものと見る見解の欠点を指摘し、時代の先進思想は現実より先行し、革命闘争で思想・意識が決定的な役割を果たすという新たな見解を示した。

また、社会革命の本質にかんする問題においても、革命をたんなる社会制度の交替としてのみ見てはならず、社会主義制度の樹立後継続される思想、技術、文化分野の革命も包括して改めて定義づけるべきだと指摘した。そして、革命の類型問題についても、従来の理論の制約を明らかにし、反帝反封建民主主義革命を独自の類型の革命としてとらえるという新たな定義を下した。

『労働者階級の領袖は個人ではない』『労働者階級の領袖は革命闘争で決定的な役割を果たす』などの談話では、領袖の地位と役割にかんする理論を体系化して、史上はじめて科学的な領袖観を定立した。

また、『地方経済の発展にかんするわが党の方針の正当性』『テアン（大安）の事業体系〔12〕は独創的な社会

主義経済管理システム』などの論文と談話では、朝鮮労働党の自立的民族経済建設路線と社会主義経済建設の基本路線の独創性と正当性を科学的に論証した。

金正日将軍は、1962 年 1 月に論文『現代帝国主義の特徴と侵略的本性について』を発表した。

この論文では現代帝国主義にたいする全面的な分析にもとづき、つぎのような結論を下している。

「…現代帝国主義はたんに独占の支配にもとづくものではなく、国家独占資本主義を政治的・経済的基礎としており、旧植民地主義ではなく新植民地主義に依拠しており、並列的に存在しているのではなくアメリカ帝国主義を頭目にして従属的に再編成されており、成長しているのではなく急速に没落しつつ最後のあがきをしている帝国主義である」

金正日将軍はまた、帝国主義の侵略的本性は変わっていないのみか、いっそう悪らつであるとし、アメリカ帝国主義の二面戦術、とくに「平和戦略」の狡猾な侵略的本質を暴露した。

1964 年 3 月 18 日に卒業論文『社会主義建設における郡の位置と役割』を発表した。これは、当時、社会主義下における農村問題に深い関心を払い、1962 年 7 月から 8 月にかけて地方の党および経済活動家昌城連席会議の準備段階と開催中の全期間、金日成主席を補佐して収

集した資料にもとづいて執筆した論文である。

論文では、社会主義建設における地域的拠点にかんする金日成主席の理論の正当性を論証し、それを発展させている。

金正日将軍は、大学時代に精力的な思想・理論活動と実践活動によってチュチェの革命偉業の遂行に大きく貢献し、チュチェの指導芸術、指導風格をそなえ、広範な青年と人民から卓越した政治活動家として尊敬されるようになった。

2

（1964・4～1974・1）

金正日将軍は 1964 年 6 月 19 日から党中央委員会で活動を開始した。

1960 年代の中期、複雑な内外情勢のもとで、朝鮮労働党第 4 回大会が示した社会主義建設の雄大な綱領を実現する闘争がくりひろげられていた。

アメリカ帝国主義者は 1962 年に「カリブ海の危機」を引き起こした後、社会主義諸国と第 3 世界諸国にたいする侵略策動を強行し、とくに朝鮮半島の情勢を極度に緊張させた。一方、国際共産主義運動に台頭した日和見主義者は帝国主義と妥協して、社会主義諸国の統一団結を破壊し、世界革命の発展に重大な難関をつくりだしていた。

一方、党内にあらわれた反党修正主義分子は、党の路線の実行を妨げていた。

このようなきびしい内外情勢のもとで、朝鮮労働党には、党を組織的、思想的にいっそう強化し、その指導的役割を高めて革命と建設を強力に推進すべき課題が提起されていた。

このような歴史的な時期に金正日将軍が党中央委員会で活動を開始したのはきわめて意義深いことであった。

金正日将軍は、党中央委員会入りした当初、党活動の重点を明らかにし、その基本を正しく設定することに深い関心を払った。

金正日将軍は 1964 年 5 月 30 日、党中央委員会組織指導部の幹部との談話でつぎのように述べている。

「わが党の事業と活動における基本は、全党に金日成同志の思想体系を確立することです。全党に金日成同志の思想体系を確立することは、わが党が存在し活動する全過程にわたって恒久的に堅持すべき活動です。したがって、党のすべての事業と活動は、金日成同志の思想体系を確立し、金日成同志により忠実にしたがい、金日成同志の教えをあくまで実行することに集中されなければなりません」

金正日将軍は、党活動において基本を正しく設定するためにはまず第一に、党中央委員会の各部署と活動家が党活動の基本を正しく設定することが重要であると強調した。

そして、党中央委員会の活動家が金日成主席に忠実にしたがう確固たる姿勢を持し、金日成主席の教えの実行に中心をおいて活動し、下部の単位の指導にあたっては必ず、金日成主席の教えを実行する明確な指導要綱を

もって活動するようにした。また、全党に金日成主席の教えを伝達する整然とした体系を確立し、その実行対策を立てて総括することを制度化した。

金正日将軍は1964年の春と夏に慈江道(チャガンド)と黄海北道(ファンヘプクト)、平安北道(ピョンアンプクト)、1965年5月には江原道(カンウォンド)と咸鏡南道(ハムギョンナムド)を現地指導して、金日成主席の教えを恣意的に解釈する傾向を根絶し、無条件実行する革命的気風を確立するように導いた。

金正日将軍は党活動の基本を正しく設定したうえで、反党修正主義分子との闘争を強力に展開した。

当時、党内に潜んでいた反党修正主義分子は、帝国主義者の侵略策動と現代修正主義者の策動が露骨になると、それに乗じて党の革命思想に反対して革命伝統を無視し、党の路線と政策の実行を各方面から妨げた。

党中央委員会で活動を開始した当初から異分子の正体を看破した金正日将軍は、党活動全般にたいする理解を深めていく過程でかれらの策動をするどく分析し、それはことごとく反党的・反革命的であり、ブルジョア修正主義的であることを察知した。

そして反党修正主義分子と決定的にたたかうことを決心し、まず党の革命伝統を抹殺する策動を粉砕した。

党の要職を占めていた反党修正主義分子は、職権を乱用して下部の党組織に、革命伝統の幅を上下左右に広

げることを主張し、抗日革命闘士の回想記の出版を妨害した。はなはだしくは建立中の普天堡（ポチョンボ）戦闘勝利記念塔の主題形象の内容を変更させ、規模も小さくするよう押しつけた。

金正日将軍は、1965 年の初頭と 1967 年 4 月に、革命伝統に雑多なものを引き入れてその純潔を汚そうとする反党修正主義分子の陰険な策動を暴露し、革命伝統は革命の道を開拓した領袖によってのみ創始されるものであり、われわれが継承すべき革命伝統はまさに金日成主席によって築かれた抗日の輝かしい伝統であり、それは朝鮮労働党と朝鮮革命の歴史的根源に、万年の礎になることを明らかにした。

そして、革命の血筋の断絶をはかる反党修正主義分子の策動を粉砕し、回想記集『人民の自由と解放のために』をはじめ革命伝統教育図書を大々的に出版し、普天堡戦闘勝利記念塔も最初の形成案どおり壮大に建立する措置を講じた。

金正日将軍は、放送と出版・報道手段を通じてブルジョア思想と修正主義思想、封建的儒教思想を流布し、「10 か年計画」と銘打って青年のあいだに遊惰な風潮をはびこらせる反党修正主義分子の狡猾な策動をもするどく見きわめて阻止した。

金正日将軍は、政治的野心家、えせ革命家である反

党修正主義分子の正体をあばきだした。かれらは自らを「指導中核」と称し、金日成主席の唯一的指導を拒否しようと企んだ。

金正日将軍は、反党修正主義分子が党内にいては金日成主席の思想にもとづく党の統一団結は達成できないと結論づけ、かれらを組織的に暴露、粉砕する全党的な闘争をくりひろげることを主張した。

1967 年 4 月中旬から、金日成主席の指導のもとに党中央委員会の活動家会議が開かれた。

この会議では、党の組織活動と思想活動、祖国統一のための活動と対外活動など各分野にはなはだしい弊害を及ぼした反党修正主義分子の罪業が全面的に暴露され、決定的な打撃が加えられた。

1967 年 5 月 4 日から 8 日にかけて党中央委員会第 4 期第 15 回総会が開かれた。

党中央委員会総会では朴金哲（パクグムチョル）、李孝淳（リヒョスン）、金道満（キムドマン）など反党修正主義分子の罪業が徹底的に暴露され、かれらを党の隊伍から除去する組織的対策が講じられた。

金正日将軍は、党中央委員会第 4 期第 15 回総会以後、反党修正主義分子の思想的影響を一掃する全党的な闘争を強力に展開するように導いた。

数回にわたって党中央委員会の活動家に、反党修正主義分子の思想的毒素を一掃する全党的な思想闘争の原

則と方途を明らかにした。この思想闘争ではあくまでも金日成主席を政治的、思想的に擁護し、党の統一と団結を強化することに重点をおき、主動分子と追随分子を区別して主動分子は除去し、追随分子は再教育すべきだとする金日成主席の教えを正しく実行するとともに、思想闘争を基本革命課題の遂行と密接に結びつけておこなうよう強調した。

金正日将軍は、反党修正主義分子の思想的影響の強い省・中央機関の幹部と文学・芸術部門、出版・報道部門活動家の思想闘争会議が正しくおこなわれるよう深い関心を払った。

金正日将軍は、1967 年 6 月末と 7 月初に数回にわたって党中央委員会宣伝扇動部、文学・芸術部門の責任幹部に会い、作家、芸術家と出版・報道部門の活動家の党の唯一思想体系の確立について具体的に指摘した。また、1967 年 7 月 17 日から 8 月 12 日にかけて咸鏡南道を現地指導し、党組織が思想闘争会議を正しくおこなって修正主義、地方主義、家族主義を一掃し、思想闘争の過程で高まった大衆の革命的熱意を引きだして経済建設で高揚を起こすようにした。

金正日将軍の指導のもとに進められた全党的な思想闘争によって、ブルジョア思想、封建的儒教思想などあらゆる不健全な思想が一掃されていった。

金正日将軍は、党員と勤労者の正しい領袖観の確立に深い関心を払った。

1967 年 8 月に党中央委員会から初級党組織にいたるまで金日成主席の教えを適時に伝達するシステムを確立するようにした。また、12 月には『金日成著作選集』をはじめ金日成主席の著作を大々的に出版し普及する対策を講じた。

また 1968 年 7 月と翌年の 8 月、両江（リャンガン）道一帯の革命戦跡地を視察し、普天堡、三池淵（サムジヨン）、葡坪（ポピョン）など両江道一帯を革命伝統教育の拠点に整備した。

金正日将軍の精力的な活動によって、党の唯一思想教育が強化され、党の思想活動全般に転換がもたらされた。

金正日将軍は人民軍内の党の唯一思想体系の確立にも大きな力をそそいだ。

金正日将軍は、党中央委員会第 4 期第 15 回総会後、人民軍の要職にあった不純分子の軍閥官僚主義的策動に反対して断固たたかった。

1967 年 7 月、人民軍のある幹部との談話とたび重なる人民軍部隊にたいする現地指導の過程で、軍の要職を占めていた軍閥官僚主義者が軍隊の「特殊性」を口実に軍隊にたいする党の指導を拒否して党の軍事路線をゆがめ、軍権を利用して軍内の党組織と政治機関を無力化していることを察知した。また、追従分子を糾合して軍閥

官僚主義の地盤を築こうと画策し、自分を英雄として描く映画を製作して偶像化していることを看破した。

これらの事実から軍閥官僚主義者は党と領袖に反対する政治的野心家、反党反革命分子であるという結論を下し、かれらと決定的闘争を展開する決心をかためた。

1969 年 1 月、金日成主席の指導のもとにおこなわれた朝鮮人民軍党委員会第 4 期第 4 回拡大総会では、軍閥官僚主義者の罪業と正体をあばき、かれらを党と軍隊の隊伍から除去した。

党と軍隊に潜入していた反党修正主義分子と軍閥官僚主義者を摘発し、党と人民軍隊内に党の唯一思想体系を確立したことは、わが党の歴史に特記すべき金正日将軍の功績である。

金正日将軍は、1960 年代の後半期に、経済建設と国防建設の並進路線を貫徹する活動をエネルギッシュに展開した。

金日成主席は、アメリカ帝国主義の新たな戦争挑発策動によって激化する情勢に対処し、1966 年 10 月の朝鮮労働党代表者会議と 1967 年 6 月末から 7 月初にかけての党中央委員会第 4 期第 16 回総会で、経済建設と国防建設を並進させる戦略的路線を貫くために新たな革命的高揚を起こす方針を示した。

金正日将軍は、新たな革命的高揚を起こすうえで第

一に解決すべき問題は日和見主義的な経済理論を粉砕することであると強調した。

当時、一部の活動家のあいだには、経済が発展し規模が大きくなるにつれ、生産成長のテンポが落ちるという「理論」と、物質的刺激を基本とする経済管理理論に一理があるとし、経済建設において消極的で保守的な立場をとる傾向があらわれていた。

金正日将軍は、1967 年 6 月 13 日、党中央委員会科学・教育部の活動家との談話『政治的・道徳的刺激と物質的刺激にたいする正しい理解のために』で、物質的刺激を絶対視する修正主義的傾向と政治的・道徳的刺激を絶対視する極左的傾向を批判し、政治的・道徳的刺激を基本とし、それに物質的刺激を適切に結合させる問題、社会主義経済建設においてテンポを基本とし、それに積極的な均衡を合わせる問題など、社会主義経済建設で提起される理論的・実践的諸問題に科学的な解答を与えた。

1967 年 10 月に開かれた党中央委員会の幹部と省・中央機関党書記の会議をはじめ機会あるごとに、修正主義的経済理論の反動的本質を指摘してそれを克服する思想闘争を展開するようにした。そして、黄海(ファンヘ)製鉄所をはじめ多くの単位の指導・点検をおこなって思想闘争を深化させた。

思想闘争の深化につれて、日和見主義的経済理論と

それを思想的よりどころにする消極性と保守主義が一掃され、すべての活動家は主体的経済理論で武装し、確信をもって党員と勤労者を新たな革命的高揚に立ち上がらせた。

金正日将軍は、全党と全人民を新たな革命的高揚へと決起させるための思想宣伝を展開した。

1967 年 7 月 3 日、党中央委員会宣伝扇動部の活動家との談話『経済建設と国防建設で革命的高揚を起こすための思想宣伝の強化について』で、すべての活動家と勤労者が自力更生、刻苦奮闘の精神を強く発揮して最大限に増産節約し、技術革命をおし進め、チョンリマ作業班運動[13]をいっそう活発に展開するよう強調した。

金正日将軍は、自ら勤労者のなかに入り、党員と勤労者を新たな革命的高揚へと立ち上がらせた。

1967 年 8 月 8 日、竜城（リョンソン）機械工場を訪ねた金正日将軍は、革命的高揚を起こすべく党の新たな方針の本質と意義について説明し、この工場の労働者が革命的高揚の先頭に立って進むよう激励した。竜城の労働者は、経済建設と国防建設の並進路線の貫徹で革新を起こすことを全国の労働者に呼びかけ、大高揚の先頭に立って 1967 年度の人民経済計画を 80 余日間も繰り上げて遂行した。竜城の労働者の呼びかけと勤労の成果は、全国の労働者を革命的高揚へと励ました。

金正日将軍は、社会主義経済建設において自立的で近代的な工業を建設して社会主義的工業化の課題を遂行する闘争を展開した。

金正日将軍は、1967 年 8 月には長津江(チャンジンガン)発電所、同年 9 月には平壌(ピョンヤン)火力発電所、1968 年 9 月には北倉(プクチャン)火力発電所の工事現場を訪ね、発電所の建設を促進して発電能力を高め、国の動力基地をかためることに力を傾けた。

そして、黄海製鉄所をはじめ金属工場と機械工場、化学工場、平壌と咸興(ハムフン)、亀城(クソン)の軽工業部門工場を現地指導して、工業の自立性を強化し、現代化を促進する問題を解決するよう導いた。

これとともに、工業部門で技術改造を推進するために基幹工業部門の多くの工場、企業所と大館(テグァン)郡をはじめ多くの市・郡の地方産業工場を現地指導し、技術改造を促進して生産工程の機械化、半オートメ化、オートメ化を実現するよう導いた。

金正日将軍は、テアンの事業体系の効果を発揮させるため、1967 年 10 月以来数回にわたって大安(テアン)電機工場を訪ね、テアンの事業体系の確立において他の工場の先頭に立つように導き、1968 年 4 月には資材供給委員会を訪れて資材供給改善の対策を立てた。

金正日将軍は、農業を急速に発展させるために、金日成主席の指導業績が秘められている粛川(スクチョン)郡、淮陽(ヘヤン)

郡浦泉(ポチョン)協同農場と黄州(ファンジュ)郡黒橋(フクキョ)協同農場をはじめ多くの郡と協同農場を訪ね、新たな農業指導体系の優越性と分組管理制[14]の生命力が発揮されるよう導いた。そして、重要な穀物生産地帯である平安南道と黄海南道、黄海北道など西海岸の平野地帯と咸鏡南道、平安北道、両江道の山間地帯の各農村を現地で指導し、穀物生産の増大と農業の多角的発展、農村技術革命促進の課題と方途を示した。

社会主義経済建設で革新を起こすための革命的高揚のなかで、社会主義的工業化の歴史的課題が達成され、工業部門の技術改造が推進され、農業もいちじるしい発展をとげた。

金正日将軍は、国防力を強化する国防建設でも革命的高揚を起こすためエネルギッシュな活動を展開した。

情勢を極度に緊張させていたアメリカ帝国主義者は、1967 年 4 月の板門店(パンムンジョム)射撃事件、1968 年 1 月の武装情報収集艦「プエブロ」号領海侵入事件、1969 年 4 月の「EC121」大型スパイ機の領空侵犯事件などの武装挑発を引き起こし、戦争前夜の情勢をつくりだした。

こうした情勢の推移にしたがって金正日将軍は、1968 年 2 月、国防力強化の具体的な課題を示し、その実現へと軍隊と人民を導いた。

まず、国防力の強化において軍人の政治的・思想的

武装に第一義的な意義を付与し、軍隊内の党組織と政治機関が軍閥官僚主義の影響を一掃し、軍人の政治・思想教育を強化するようにした。

また、人民軍の根幹である指揮官が金日成主席の主体的戦法に精通し、いかなる状況のもとでも敏活な戦闘指揮と完璧な部隊管理など主体的用兵術を身につけるよう対策を立てた。これとともに、訓練において形式主義と簡略化を強く戒めた。

1965 年の春から 1967 年の夏にかけて人民軍の飛行区分隊と東西両海岸の海軍部隊、各砲兵区分隊を訪ねた金正日将軍は、戦闘訓練を実質的におこなうように導いた。

また、人民軍の武力装備の改善に深い関心を向け、国の実情と朝鮮人の体質に合う威力ある現代兵器を多く生産するよう、軍需工業部門を指導した。

金正日将軍は、全人民武装化のために労農赤衛隊の指揮系統を整然と確立し、武力装備と訓練を強化した。一方、全国土の要塞化をより高い段階で実現するため、1967 年 7 月とその後、重ねての東西両海岸と軍事要衝地帯の視察を通じて、地理的特性に即して防御陣地を堅固に築くように導いた。

金正日将軍のエネルギッシュな指導によって、国防力はいちじるしく強化され、敵の戦争挑発策動が粉砕で

きるようになった。

金正日将軍は、金日成主席の誕生 60 周年を盛大に記念し、この日に際して人民が金日成主席への深い忠誠心をいだき、チュチェの革命偉業を継承し完成するため献身するように導いた。

1971 年 8 月 30 日、革命の聖山白頭(ペクトウ)山に登った金正日将軍は、金日成主席の苦難にみちた革命の 60 星霜を振り返り、随行員につぎのように述べた。

「世界に金日成同志のように長きにわたってきびしい革命の道を歩んだ人はいません。

あと数か月すれば、金日成同志は還暦を迎えることになります。これからは、金日成同志が切り開いた革命偉業をわれわれがになっていかなければなりません」

金正日将軍は、1972 年 4 月の談話をはじめ多くの機会に、金日成主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業を継承し完成させるのは、朝鮮人民の崇高な使命であることを明らかにした。そして金日成主席の誕生 60 周年を契機に金日成主席の偉大さと革命業績を広く紹介し、長く伝えるための活動に力をそそいだ。

まず、金日成主席の古典的著作と『金日成略伝』などの教育図書を大々的に出版した。

そして平壌の万寿台(マンスデ)の丘に金日成主席の銅像を建立

し、両江道をはじめ全国の革命戦跡地、革命史跡地を子孫万代に伝えるべく整備した。また、朝鮮革命博物館と各道の「金日成同志革命事績館」をととのえて開館した。

　また、金日成主席への世界各国の党・国家首班とレジスタンス闘士、国際機構の代表、各界人士の贈呈品を国宝として保存するため贈物陳列館を建設した。

　一方、金日成主席の誕生 60 周年までに 6 か年計画の 2 年分の課題を繰り上げて完遂し、6 か年計画遂行のキーポイントとなる工作機械 3 万台の生産目標を達成する勤労闘争を展開してそれを達成するよう指導した。

　金正日将軍は、「金日成勲章」と「金日成賞」を制定し、その授与を意義深いものにするようはからった。

　金日成主席の誕生 60 周年は、朝鮮人民に主席を戴いて革命を進める民族的誇りと革命的自負を胸に刻み、その革命偉業を継承し完成すべく革命的使命感をいだかせる重要な契機となった。

　金正日将軍は、党中央委員会の指導員、課長をへて、1970 年 9 月から副部長、1973 年 7 月から部長、同年 9 月から党中央委員会書記の重責をにない、1972 年 10 月に党中央委員会委員に選出された。

　金正日将軍は、現実発展の要請に即応して党活動を刷新する活動をエネルギッシュに導いた。

金正日将軍は、まず党組織活動の抜本的な改善をはかって全党に新しい党生活総括制度を確立した。

党生活総括は、党生活の基本的形式の一つであり、党員を革命的に教育し、組織的、思想的に鍛える強力な手段である。

それで新しい党生活総括制度についての講習と方式講習をおこない、1973 年 9 月には全党に新しい党生活総括制度を受け入れるようにした。その結果、党員の党生活に新たな転換がもたらされ、党組織の戦闘的機能と役割がいちじるしく高まった。

金正日将軍は、党の隊伍を拡大し、その質的構成を改善するために、党勢拡大の改善と強化に努めた。

革命と建設の重要部門の党勢を強化する方向で党勢拡大をはかる一方、新しい世代、とくに青年労働者のなかから先進分子を多く入党させた。

金正日将軍は、党の思想活動を革命的に改善するために心血をそそいだ。

まず、党の思想活動において徹頭徹尾チュチェ思想教育を基本とし、1973 年 3 月には各種名称の学習班を「金日成同志革命思想学習班」に改編し、すべての学習班が金日成主席の著作を基本にして学習するようにした。また、「金日成同志革命活動史研究室」を拠点にしてチュチェ思想の原理教育を幅広くおこなうようにした。

金日成主席によって抗日革命闘争期に創造された問答式学習方法を取り入れて党学習に転換をもたらす一方、全党的に講師の陣容を能力ある活動家でかためてその水準を高める対策を立て、講演網も再整備した。

金正日将軍は、党の思想活動の方法を改善するために、生産扇動を力強くくりひろげるようにした。

1973 年 6 月に党、経済、出版・報道部門の活動家と芸術家からなる生産扇動隊を載寧（チェリョン）、殷栗（ウンリュル）、苔灘（テタン）鉱山に派遣して生産扇動の経験を積ませ、それにもとづいて同年 11 月には、金星（クムソン）トラクター工場と勝利（スンリ）自動車総合工場で大がかりな生産扇動をおこなってそのモデルをつくるようにした。

ついで、生命力が実証された新たな生産扇動方法を全国に一般化するために機動芸術扇動隊を設けた。そして、新聞、放送、テレビ、映画による生産扇動も強化し、党および行政・経済活動家が社会主義建設の現場に出て生産扇動をおこなうようにした。

金正日将軍は、党活動の体系と方法の改善に深い関心を払った。

まず、党活動における形式主義と官僚主義、主観主義を一掃する重要な方途として、各級党委員会の部署が適格な職能を定め、それにしたがって活動する秩序を確立した。

そして、党活動家が抗日遊撃隊式に背のうを背負い下級機関に出て活動することを制度化し、1 か月に 20 日間は下級機関に出て活動し、10 日間は部署にもどって再武装し、作戦の練り直しをする整然とした下部指導体系を確立した。

また、党活動で命令や指示を下し、統計を提出させるような行政化の傾向を一掃し、党活動を徹底した対人活動、政治活動に切り換えた。

金正日将軍のエネルギッシュな指導によって、党活動の内容と方法、体系全般において、長いあいだ扶植されてきた官僚主義、形式主義の古い枠と旧来の方法が克服され、党活動が対人活動を基本とする新しい発展の道に入った。

党中央委員会で活動を開始した当初から文学・芸術部門の活動に深い関心を払ってきた金正日将軍は、文学・芸術革命を起こしてこの部門の活動に転換をもたらした。

金正日将軍は、文学・芸術の内容と形式、創作体系と創作方法の全領域で古いものを打破して新しいチュチェの文学・芸術を建設することを文学・芸術革命の本質として規定した。

そして映画芸術に力を集中して、文学・芸術革命の

突破口を開いた。

映画芸術は、文学・芸術の多様な手段が有機的に結合した総合芸術であり、まず映画芸術の発展をはかり、その成果を一般化するのは、文学・芸術のすべての部門を急速に発展させる裏づけとなった。

金正日将軍は、映画革命のために、その担当者である映画人の政治的・実務的準備に第一義的な関心を向けた。

まず、映画人にチュチェ思想を体得させ、革命化[15]、労働者階級化[16]を促す一方、金日成主席の教え伝達体系と学習体系を整然と確立した。そして 1970 年 1 月には従来の古い芸術総括会議制度をなくし、金日成主席の主体的文芸思想研究会を定期的におこなう措置を講じた。これとともに、何回となく映画芸術部門の党会議と舞台公演総括会議などを指導し、映画人が党と領袖にたいする忠実性を身につけ、党の指導のもとに創作活動をおこなう規律と秩序を確立した。また、映画人が演技のレッスン、話術のレッスンと美学理論学習を強化し、技量発表会を定期的に催して芸術的技量を高めるように導いた。

金正日将軍は、映画創作に根本的転換をもたらす活動をエネルギッシュに指導した。

まず、金日成主席が抗日革命闘争の時期に創作した作品を映画化する作業を通じて映画革命を起こす構想を示した。

1967 年には、金日成主席によって創作された作品を映画化する作業を担当する白頭山（ペクトウサン）創作団を発足させ、劇映画『遊撃隊の 5 兄弟』をはじめ、革命伝統をテーマとする作品創作で経験を積むようにした。それにもとづいて 1968 年 4 月、不朽の名作『血の海』を映画化する課題を示し、120 余回の指導を通じて完成させ、つづいて『ある自衛団員の運命』をわずか 40 日という短期間に映画化するように導いた。また、『花を売る乙女』を映画化する作業もエネルギッシュに指導し、第 18 回国際映画祭で特別賞、特等メダル受賞の栄誉に輝く傑作ならしめた。

金正日将軍はこの過程で、チュチェの革命的映画芸術の伝統を築いた。

1970 年 6 月 18 日の作家、演出家との談話『社会主義の現実を反映した革命的映画をさらに多く創作しよう』で、社会主義現実テーマの映画をより多く創作する課題を提示し、その実現において提起される理論的・実践的問題を解明し、具体的な指導をした。こうして 1970 年の 1 年間だけでも、人民賞受賞作品『花咲く村』をはじめ数十本の名作が創作された。

映画革命が遂行され、文学・芸術革命の突破口が開かれた。

金正日将軍は、映画革命の成果と経験にもとづき

1969 年 9 月に歌劇革命を起こす方針を示し、それを実現する活動を指導した。

歌劇革命は、文学・芸術革命において提起されるきわめて重要な問題の一つであった。長いあいだ歌劇分野に残存していた唱劇や在来式歌劇の古い枠を打ちこわし、新しい革命歌劇を創作してこそ、歌劇芸術を時代の要請に即応して開花発展させ、人民の享有物にすることができるのであった。

金正日将軍は、革命的内容と民族的形式にもとづいて歌劇芸術を現代化、大衆化することを歌劇革命の基本的課題として規定した。また、歌劇の内容を革命的なもので一貫させる基礎のうえで、基本的表現手段である歌を有節歌謡化し、パンチャン〔17〕(傍唱)を広く導入し、舞踊をドラマと密着させ、ドラマの発展にそってたえず変化する流れ式立体舞台をつくりだすという朝鮮式の新しい歌劇創作の原則を示した。

このように歌劇革命の課題と原則を明らかにした金正日将軍は、1971 年 3 月下旬、『血の海』を歌劇化する課題を示した。

金正日将軍は、つぎのように述べている。

「われわれは、不朽の名作『血の海』を歌劇化する過程を通じて歌劇革命を起こさなければなりません」

金正日将軍は歌劇台本を原作に忠実に完成させ、中

央と地方のすぐれた創作家、芸術家で大きな創作スタッフを組織した。そして創作家、芸術家とともに過ごしながら、演出と演技、歌謡の選択と完成、立体舞台美術の創作にいたるまで細心に指導した。

その結果、『血の海』を歌劇化する作業は 4 か月間で完成され、1971 年 7 月に公開された。革命歌劇『血の海』の創作は、歌劇芸術の新時代を開いた歴史的転換点に、『血の海』式革命歌劇の新しい歴史を開く端緒となった。

金正日将軍は、『血の海』式歌劇の創作によって初の歌劇革命を遂行したあと、『党の真の娘』『密林よ語れ』『花を売る乙女』『金剛（クムガン）山の歌』などを革命歌劇に再現する作業を指導して 5 大革命歌劇と呼ばれる名作として完成した。

その後にも、革命歌劇『ある自衛団員の運命』『明るい太陽の下で』など多くの歌劇をつぎつぎと創作するようにして歌劇革命の成果を強固にし、発展させた。

金正日将軍は、1966 年 2 月、自主時代と朝鮮革命の要請に即応した新しい革命文学を建設する方針を示した。

金正日将軍は、つぎのように述べている。

「『新しい革命文学を建設しよう!』、まさにこれがこんにち、わが国の文学が堅持すべき戦闘的スローガンです」

金正日将軍は、新しい革命文学を建設するというのは、名実ともに領袖を形象化した文学の建設を意味することを明らかにし、金日成主席を形象化した革命的な文学作品の創作に力をそそぐようにした。

そして、優秀な作家で 4 ・ 15 文学創作団を組織し、創作で提起される理論的・実践的問題を解明し、作品の思想的・芸術的水準を最高のレベルで保障するようこまやかに指導した。その結果、『革命の黎明（れいめい）』『1932 年』をはじめ金日成主席を形象化した叢書『不滅の歴史』に属する長編小説が相ついで創作、出版された。

また、金日成主席が抗日革命闘争の時期に創作した作品を小説化し、金日成主席に限りなく忠実なわれわれの時代の人間の思想的・精神的品格を深く描いた革命伝統テーマと祖国解放戦争テーマ、社会主義現実テーマ、祖国統一テーマの作品をより多く創作するよう指導した。

金正日将軍の指導によって、金日成主席が創作した『血の海』と『花を売る乙女』『ある自衛団員の運命』が革命文学として再現され、長編小説『永遠なる微笑』『生い茂るヒマワリ』『ポプラ』などの名作が創作された。

金正日将軍は、音楽、舞踊、美術、サーカスなど文学・芸術の他の分野でも革新を起こすように導いた。こうして、1970 年代にチュチェの文学・芸術は全盛期を迎えるようになった。

金正日将軍は、深奥な思想的・理論的探究によって深化、発展させた文芸思想・理論と方針、文学・芸術革命を指導する過程で積み上げた成果と経験を集大成して、1973 年 4 月に著作『映画芸術論』を発表した。

この著作には、共産主義的人間学にかんする理論、文学・芸術作品の種子（チョンジャ）[18]にかんする理論、革命的な創作体系と創作指導体系にかんする理論、主体的な映画演出理論と俳優の演技、撮影、音楽、美術理論など、チュチェの文学・芸術の建設で提起される理論的・実践的問題に全面的な解答が与えられている。

金正日将軍は、朝鮮労働党第 5 回大会で示された、重労働と軽労働の差、農業労働と工業労働の差を著しく縮め、女性を家事の重い負担から解放することを基本内容とする 3 大技術革命[19]を力強く推進した。

高熱労働と有害労働をなくし、重労働と軽労働の差を縮めるカギを生産工程のオートメ化に見いだした金正日将軍は、工業部門で全面的オートメ化を実現する運動を導いた。

全面的オートメ化を実現するため、黄海製鉄所をオートメ化のモデルケースにして緻密な指導をおこない、それを工業部門に一般化する活動を積極的に推進した。

生産工程のオートメ化とともに、骨がおれ手間のか

かる作業の機械化、総合的機械化を実現する運動も強力に展開した結果、炭鉱と鉱山の採掘、運搬設備の大型化、高速化が推進され、林業、建設などすべての部門の機械化水準がさらに高まった。

金正日将軍は、工業労働と農業労働の差を縮めるための農村技術革命の遂行に深い関心を払った。

そして農業の総合的機械化のために、金星トラクター工場と勝利自動車総合工場が黄海製鉄所のオートメ化の経験を取り入れて生産能力拡張工事をおし進める一方、各道に農業機械工場を建設し、各郡に部品生産基地と修理基地をととのえ、協同農場に簡単な農業機械を製作、修理する物質的・技術的土台を築いた。

また、青山（チョンサン）里で農業の総合的機械化と化学化を成功裏に実現して、青山協同農場を農村技術革命のモデルにし、それを全国に一般化する活動もおし進めた。

金正日将軍は、女性を家事の重い負担から解放するため、各道で建設中の穀物加工工場と市、郡で建設中の製麺工場、炊飯工場、トウモロコシ加工米工場、そして各地で建設中の野菜加工工場、魚類加工工場、果物加工工場を早急に完成して操業するようにした。

金正日将軍の深い関心と指導によって、朝鮮労働党第5回大会で示された3大技術革命の課題が成功裏に促進され、朝鮮人民は骨のおれる労働から少なからず解放

され、自主的で創造的な生活が営めるようになった。

金正日将軍は、金日成主席の意を体して、祖国統一の偉業を実現する闘争を精力的に導いた。

金正日将軍は祖国統一の基本綱領を実現するたたかいを精力的に導いた。

金日成主席の示した自主、平和統一、民族大団結の祖国統一の 3 大原則をそのとおり反映した北南共同声明を採択し、それを内外に公表させた。

1972 年 5 月、北南共同声明の草案を検討し、祖国統一の 3 大原則にもとづいて声明の全般的内容が構成されるよう指導した。また、南側が合意した祖国統一の 3 大原則の公表を遅延させようと策動するのに対処して、板門店会談で主動的攻勢に出る一方、公明正大な統一原則の内容が世界に公開されるよう報道活動を活発に展開するようにした。その結果、1972 年 7 月 4 日、自主、平和統一、民族大団結を基本内容とする北南共同声明が発表された。これは、初の民族共同の統一綱領を構築して内外に宣布した歴史的出来事であった。

金正日将軍は、7・4 共同声明の発表後、祖国統一の 3 大原則を実現する闘争を力強く導いた。

北南赤十字団体の予備会談では、南朝鮮当局者のかねてからの遅延戦術を破綻させる方策を示し、1971 年 9

月から1年間も引き延ばされていた北南赤十字予備会談をわずか20日間で終了させ、1972年8月から本会談に移るようにした。

金正日将軍は、北南高位級会談も積極的に指導した。

対話の場で南側がつくりだす人為的な障害を主動的に打開し、会談で統一のための根本的な問題を協議するようにした。

その結果、民族の常設的な共同機構として南北調整委員会が正式に構成されて、南朝鮮人民のあいだでは祖国統一の気運が急激に高まった。

金正日将軍は、金日成主席が示した祖国統一の5大方針[20]の貫徹をめざすたたかいへと全党と全人民を奮い立たせた。

1973年6月23日、金日成主席は祖国統一の5大方針を新たに示した。

この5大方針は、祖国統一の3大原則を当時の情勢に即応して具体化したもので、内外の分裂主義者の民族分裂策動に鉄槌を下し、全民族の統一意志を内外に誇示した宣言であった。

金正日将軍は、マス・メディアを通じて祖国統一の3大原則と5大方針の解説、宣伝活動をおこなうようにする一方、全国各地でこれを支持し、7・4共同声明を反故にした南朝鮮当局者を暴露、断罪する大衆集会を広範

に催すように導いた。

この過程で、祖国統一の 3 大原則と 5 大方針の公明正大さが内外に広く認識され、アメリカ帝国主義者と南朝鮮当局者の「2 つの朝鮮」策動の分裂主義的本質があばかれた。

金正日将軍は、祖国統一に有利な国際環境をつくるための活動に深い関心を払い、積極的な外交活動を展開するようにし、1973 年 6 月と 7 月には国連常駐代表部の設置と国連を通じての対外活動で提起される諸問題を明示した。

こうして、1973 年 9 月に開催された第 4 回非同盟諸国首脳会議をはじめ、国際会合と国際機構会議では、祖国統一の 3 大原則と 5 大方針を積極的に支持する決定と宣言、決議が採択、発表された。また、1973 年下半期に開かれた国連第 28 回総会では祖国統一の 3 大原則を歓迎し、アメリカ帝国主義の朝鮮内政干渉の道具である「国連韓国統一復興委員団」の即時解体の決議が採択された。

祖国統一の 3 大原則と 5 大方針を実現する闘争の過程で、アメリカ帝国主義者と南朝鮮当局者はますます孤立し、祖国統一の確信はさらに強まった。

金正日将軍は、革命発展の要請に即応して対外活動

に新たな転換をもたらすために活動した。

1960 年代中期の国際情勢は複雑をきわめていた。アジア、アフリカ、ラテンアメリカでは数多くの国が民族の独立を達成し、新しい社会建設の道に入り、一つの新興勢力として登場していた。進歩的勢力の成長に恐れをなした帝国主義者は、いわゆる「平和戦略」をかかげ、大国とはなるべく関係を悪化させず、進歩的な小国を各個撃破しようと策動した。

一方、社会主義諸国と国際共産主義運動は、隊列内に現われた左右の日和見主義とそれによる意見相違のため試練に直面し、団結した勢力として進むことができなかった。

当時の情勢は、反帝革命勢力の団結を実現して、帝国主義者の侵略と戦争策動を阻止、破綻させることを切実に求めていた。

朝鮮労働党には、世界革命発展のためにチュチェ思想の旗をかかげて対外活動を積極的に展開すべきさし迫った課題が提起されていた。

金正日将軍は、当時の情勢を洞察し、対外活動に転換をもたらす画期的な対策を立てた。

対外活動の総体的方向と基本使命、対外部門の活動家が堅持すべき立場と姿勢、資質を明らかにし、自らの実践的模範をもって対外部門の活動家を導いた。

1965 年 4 月 9 日から 21 日まで金日成主席に随行してインドネシアを訪問した日々には金日成主席の対外活動を補佐した。

金正日将軍は、国の対外関係の発展のために、新興諸国との友好・団結の強化を対外活動の主要攻略方向としてとらえていくように導いた。

ベトナム、ラオス、カンボジア人民の反帝反米闘争、アメリカ帝国主義者とイスラエル膨張主義者に反対するアラブ諸国の闘争、民族解放をめざすアフリカ諸国の闘争、キューバをはじめとするラテンアメリカ諸国の反米闘争などを積極的に支援し、戦闘的連帯を強化することに深い関心を払った。また、アジア、アフリカの新興諸国との政治、経済、文化の交流と協力を発展させることに努めた。

そして、国の対外関係の拡大発展のために、資本主義諸国との国家関係を発展させ、国際機構にも積極的に加入させた。

こうして、朝鮮の対外関係は、1970 年代中期にいたって 60 余か国と大使級外交関係を結び、100 余か国と経済・文化交流をおこない、百数十の国際機構に加盟して活動するまでに発展した。

3

(1974・2～1980・9)

金正日将軍は、金日成主席を積極的に補佐してきた学生時代と党中央委員会での長年の活動過程で体現した品格と資質、党と人民のまえに積みあげた大きな革命業績により、全党と全人民から敬慕された。

金正日将軍の非凡さを実生活を通じて体得したすべての党員と人民は、前から金正日将軍を「親愛なる指導者同志」「英明な指導者同志」と呼称してたたえた。

1974 年 2 月 13 日、金正日将軍は朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 8 回総会で党中央委員会政治委員会委員に選出された。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化綱領を宣布し、チュチェの偉業を新たな高い段階に発展させる闘争を指導した。

金正日将軍は金日成主席の革命思想を定義づける思想・理論活動を精力的に進めた。

1966 年 5 月から 1969 年 7 月までの期間に、マルクス

とエンゲルス、レーニンの主要著書を全面的に研究した。その後、精力的な思索と探究をつづけ、金日成主席の革命思想を科学的に定義づけるうえで提起される理論的・実践的問題を解明し、ついにチュチェの新しい哲学的原理にもとづいている金日成主席の革命思想をチュチェの思想、理論および方法の全一的な体系として定義づけた。

久しい前から金日成主席の革命思想にもとづいて朝鮮労働党の最高綱領を定めることを構想してきた金正日将軍は、1967 年に反党修正主義分子との闘争を展開する過程で、チュチェ思想による全社会の一色化を党の最高綱領として示す構想をさらに練りあげた。そして、1970 年代中期には、その実現のための主体的・客観的条件が熟成したと認めた。

全社会を一つの思想で一色化するスローガンをかかげ、それを実現するには、時代の要請を反映する正しい指導思想がなければならず、思想の一色化が社会と革命発展の熟成した要請として提起され、また、それを受容しうる大衆の高い覚悟と準備された政治的力量がなければならない。当時、朝鮮にはそうした条件が熟していた。

金正日将軍は、社会発展と革命発展の熟成した要請を洞察し、1974 年 2 月 19 日、全国党宣伝活動家の講習会で全社会のチュチェ思想化を朝鮮労働党の最高綱領として宣布した。

全社会をチュチェ思想化するというのは金日成主席の革命思想を指導指針として朝鮮革命を前進させ、チュチェ思想にもとづいて共産主義社会を建設し完成することを意味する。

全社会のチュチェ思想化は、人間と社会と自然をチュチェ思想の要求どおりに改造して共産主義の思想的要塞と物質的要塞を占領[21]し、勤労人民大衆の自主性を完全に実現する共産主義建設綱領である。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化が党の最高綱領になるのは、このスローガンに朝鮮労働党の最高目的とそれを実現する根本方途が明示されているからだと指摘した。そして、全社会のチュチェ思想化で提起される重要な問題と、その解決のための原則的方途についても提示した。

全社会のチュチェ思想化を党の最高綱領として宣布したことは、党建設と朝鮮人民の革命闘争において重要な意義をもつ画期的な出来事であった。

金正日将軍は 1979 年 4 月 28 日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の責任幹部協議会でおこなった演説『党の指導体系の確立について』でつぎのように述べている。

「党の指導体系を確立するということは、全党に党の決定と指示を無条件あくまで実行する革命的気風を確

立し、鉄の規律をうち立て、党員のあいだで党の組織観念を高めて党生活を強化し、革命と建設にたいする党の指導を確固と保障することを意味します」

金正日将軍は 1979 年 5 月 10 日、党の指導体系の確立問題についての全党的な集中学習と集中講習、思想闘争会議をおこなうようにした。また、各級党委員会をうちかため、その機能と役割を高めて政権機関活動、行政・経済活動、社会安全、司法・検察活動にたいする党の指導を強化した。

金正日将軍の指導によって、各級党組織の戦闘力と指導的役割がいっそう高まり、革命と建設の各分野にたいする党の唯一的指導が保障されるようになった。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化における党の地位と役割を深く洞察し、1974 年 8 月 2 日に全党のチュチェ思想化の方針を示した。

全党をチュチェ思想化するということは、すべての党員をチュチェ型の精鋭分子にし、党建設と党活動を金日成主席の思想と理論、方法にもとづいておこなうことを意味する。これは結局、わが党を完全無欠なチュチェの党にすることを意味する。

全党をチュチェ思想化するには、党内に唯一思想体系と指導体系を確立しなければならない。

金正日将軍は、すべての党組織が党の唯一思想体系

と指導体系の確立を党事業と党活動の基本方針としておし進めるようにした。

そして、全党を幹部化し、幹部革命を起こして党の隊伍を質的に強化することを全党のチュチェ思想化の重要な方途としてとらえて貫くように導いた。

全党を幹部化するということは、党内ですべての幹部を一等級高い幹部の水準に引きあげ、すべての党員を幹部の水準に引き上げることを意味し、幹部革命を起こすというのは、幹部陣容をチュチェ型の精鋭分子でかため、すべての幹部の水準をいちだんと高めることを意味する。

金正日将軍は、全党の幹部化のために、党の隊伍を階級的に、政治的、思想的にうちかため、幹部と党員を学習と党組織生活、革命実践のなかで教育し鍛える活動に綿密に取り組むようにするとともに、党勢拡大を党隊伍の質的強化に基本をおいた。

また全党のチュチェ思想化のために、各級党委員会の責任幹部と部署が幹部との活動、党員との活動、大衆との活動、下部党組織との活動を強化できるよう整然とした党の内部活動体系を確立し、下部を掌握、統制して実質的に援助する下部指導体系、部署間の提携・共同作戦を強めて提起される課題を適時に解決する活動体系を確立した。

そして、金日成主席が革命と建設を指導する過程で創造し発展させてきた活動方法を金日成的活動方法として定義づけ、すべての活動家が金日成的活動方法を体得し、具現するようにした。

金正日将軍の指導によって、全党のチュチェ思想化が推進されて、朝鮮労働党はチュチェ型の党にいっそう強化され、全社会のチュチェ思想化の偉業が促進された。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化の要求に即応して、各階層の大衆を党のまわりにかたく結集する活動を指導した。

金正日将軍は各階層の大衆との活動を強化するためには、党活動家が革命的大衆観点を確立し、党の大衆路線にしっかり依拠して活動し、活動方法と作風を改善し、具体的な方法論をもって階層と対象の特性に合わせて活動すべきであるとした。

その結果、社会の全構成員を党のまわりに結集するうえで転換がもたらされ、社会主義建設におけるかれらの革命的熱意と創造的積極性がいちじるしく高まった。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化の要求に即応して、党の革命伝統を全面的に継承、発展させるためエネルギッシュに活動した。

党の革命伝統には全社会のチュチェ思想化の思想と理論、方法が盛りこまれており、豊かな経験と業績がこもっている。

金正日将軍は 1974 年 3 月、「生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に!」というスローガンを示し、党員と勤労者を革命伝統にたいする正しい観点と立場に立たせる一方、革命伝統教育のシステムと方法を現実発展の要請に即応して改善し、革命戦跡地、革命史跡地の整備に力を入れた。

そして、朝鮮労働党創立 30 周年を迎え、王在山（ワンジェサン）革命史跡地の建設を発起し、1974 年 5 月から 1975 年 10 月にかけて朝鮮の最北端の建設現場を 3 回も現地指導した。つづいて 1976 年 7 月初には、朝鮮革命の発祥の地である革命の聖山白頭（ペクトウ）山と三池淵（サムジヨン）一帯を革命伝統教育の拠点に、大規模な露天革命博物館にする構想を示し、その規模と形式、内容において第一の革命戦跡地に整備するよう建設を指導した。

また、各地の革命史跡地をりっぱに整備させて、数年のあいだに両江（リャンガン）道をはじめ全国の数多くの革命史跡地を革命伝統教育の学校にかえた。そして、革命戦跡地、革命史跡地にたいする参観をおこない、放送、芸術作品を通しての革命伝統教育を強化した。

金正日将軍は、「生産も学習も生活も抗日遊撃隊式

に!」というスローガンの要求が社会生活全般に具現されるよう深い関心を払った。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「革命伝統教育の目的は、たんにかつての歴史的事実を教えることにあるのではなく、あくまでも金日成同志の指導のもとにあらゆる試練を克服し、輝かしい勝利をかちとったその崇高な革命思想と闘争精神を学び、見習わせるところにあるのです」

金正日将軍は、すべての幹部と党員と勤労者が、いかなる困難な状況のもとでも金日成主席の命令を無条件実行した抗日遊撃隊の革命的活動気風と方法を実践に具現するようにした。とくに、1970 年代の後半期、党に提起された課題がきわめて重大で、情勢が複雑をきわめた状況のもとで、党員と勤労者が自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮して社会主義建設での障害と難関を克服するようにした。

金正日将軍は、すべての党員と勤労者が「革命家にとって学習は第一の義務である」という金日成主席の教えを高くかかげ、抗日遊撃隊員の学習気風を見習って学習を革命活動の第一の工程とみなし、習慣化するように導いた。

また、全社会に抗日遊撃隊式生活気風を確立することに深い関心を払い、すべての党員と勤労者が革命的組

織生活を強化して政治的生命を輝かし、国の経済管理を正しくおこない、日常生活を文化的かつ質素に、楽天的にする気風を確立するようにした。

金正日将軍の指導によって、生産も学習も生活も抗日遊撃隊式にという党のスローガンは、社会の全構成員の信念となって活動と生活のすべての分野に具現され、全社会に白頭の革命精神[22]がみなぎり、全社会のチュチェ思想化がいっそう力強く推進された。

金正日将軍は、社会主義大建設を促進する闘争を導いた。

金日成主席は、1974 年 2 月、党中央委員会第 5 期第 8 回総会で、社会主義経済建設で 6 か年計画を繰り上げて完遂し、新たな展望目標を達成するための社会主義大建設綱領を示した。

金正日将軍は、1974 年 2 月、社会主義大建設を促進するため、社会主義経済建設のすべての分野で速度戦を展開する革命的方針を示した。社会主義大建設の目標は、その規模と質的水準において前例のないもので、速度戦を展開しなければ達成することができなかった。

金正日将軍は速度戦の本質と基本的要求、速度戦を展開する基本方途を明らかにした。

速度戦の基本的要求は、全力を総動員して事業を最

大限の速さでおし進めながら、その質を最上の水準で保障することであり、その基本方途は思想革命、技術革命を力強く進める一方、組織・指導活動を裏付けることである。速度戦の方針は、チュチェ思想と継続革命の思想を具現して社会主義建設の基本戦闘形式を明らかにした方針である。

金正日将軍は、「速度戦で前進しよう！」というスローガンのもとに全党と全人民を社会主義大建設に奮起させた。経済建設にたいする党の指導を強化する一方、1974 年 5 月には咸鏡（ハムギョン）南道と咸鏡北道、6 月には平安（ピョンアン）北道など国の経済発展で重要な役割を果たしている工場、企業所、協同農場を訪ね、実情を調べて懸案を解決し、党員と勤労者を社会主義大建設へと励ました。

社会主義大建設が開始された初年度の 1974 年の人民経済計画を遂行することは、党創立 30 周年以前に 6 か年計画を繰り上げて完遂し、社会主義大建設を高い段階へと飛躍させるキーポイントであった。

金正日将軍は、1974 年の人民経済計画の遂行が危ぶまれた 10 月に「70 日間戦闘」を発起し、その陣頭指揮をとった。

1974 年 10 月 9 日、党中央委員会・政務院の責任幹部と道党委員会責任書記の協議会でおこなった演説『全党が奮起して 70 日間戦闘を力強く展開しよう』で、「70

日間戦闘」の目的と中心的課題、その遂行方途などを示し、全党、全国、全人民が 10 月 21 日から「70 日間戦闘」を開始するようにした。

そして、「70 日間戦闘」勝利のカギを思想動員に求め、勤労者のあいだで党と領袖にたいする忠実性教育を強化するとともに、前進を妨げるあらゆる古い思想を克服する闘争を展開するようにした。また、大衆を内部の潜在力の動員に奮い立たせて機関本位主義をなくし、死蔵されていた莫大な物資、資材の予備を探し出すようにした。

同時に、「70 日間戦闘」の主要攻略方向を採掘工業、輸送、輸出部門に設定し、これに指導メンバーと宣伝・扇動陣を集中的に派遣する一方、労働力と設備をより多く提供し、全国が支援するようにした。

金正日将軍の指導により、「70 日間戦闘」は成功した。

この期間に工業生産は以前に比べ 1.7 倍に成長し、1974 年度の工業総生産額は前年に比べ 117.2%に増大した。その結果、危ぶまれた年間計画が超過遂行され、6 か年計画を完遂できる展望が開かれた。

1975 年 2 月 15 日、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は、金日成主席の意を体し、党活動をはじめ革命と建設の各分野で業績をきずきあげた金正日将軍に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与した。

金正日将軍は、「70 日間戦闘」の成果にもとづき、朝鮮労働党創立 30 周年以前に 6 か年計画の主要目標を繰り上げて達成するための闘争を指導した。

1975 年初に「速度戦青年突撃隊」を組織し、1975 年 7 月初には剣徳(コムドク)鉱山を現地で指導し、この鉱山の生産増大のための画期的対策を立てた。また、殷栗(ウンリュル)鉱山の大型長距離ベルト・コンベヤー輸送ラインと茂山(ムサン)鉱山——金策(キムチェク)製鉄所間の大型長距離精鉱パイプラインを早急に敷設して、鉱石運搬とはく土処理で大きな前進をもたらすようにした。

金正日将軍の指導と人民の献身的な努力により、党創立 30 周年をひかえた 1975 年 8 月末に、6 か年計画の電力、石炭、化学肥料の生産目標が成功裏に達成され、織物、水産物の生産目標はそれより先に達成された。そして、穀物生産目標は 2 年繰り上げて達成された。

金正日将軍は、6 か年計画の完遂につづいて、第 2 次 7 か年計画の遂行をめざす闘争を指導した。

第 2 次 7 か年計画(1978〜1984)は、人民経済の主体化、現代化、科学化を促進して社会主義の経済的土台を強固にし、人民生活をいちだんと向上させることを基本的課題とする経済建設綱領であった。

金正日将軍は、第 2 次 7 か年計画を成功裏に遂行するために、1978 年 1 月 1 日、党中央委員会組織指導部、

宣伝扇動部の責任幹部におこなった演説で「自力更生の革命精神をさらに高く発揮しよう!」というスローガンを示し、同年 1 月に開かれた党中央委員会第 5 期第 16 回総会で全党員と勤労者を新たな展望計画の遂行に奮い立たせた。

また、すべての党組織が党活動を経済活動と密着させて経済建設を力強く推進するようにした。

金正日将軍は、第 2 次 7 か年計画の初年度の課題を共和国創建 30 周年以前に繰り上げて遂行する「100 日間戦闘」を組織、指導して新たな展望計画遂行の突破口を開いた。

石炭生産の増大を経済発展全般の当面のカギとみなした金正日将軍は、1978 年 11 月、主要な炭鉱に党指導グループを派遣する一方、各炭鉱に機械設備と坑木を十分に供給する対策を立て、安州（アンジュ）炭鉱を総合的機械化のモデルケースにし、その経験を広く一般化するようにした。

そして、人民経済の発展に輸送を追いつかせるため、1978 年の年頭から鉄道部門で「輸送革命 200 日間戦闘」を再度おこなわせ、1979 年 7 月には「5 ・ 18 無事故・定刻超過輸送運動」の火を点じ、大衆的超過輸送運動が展開されるようにした。また、数区間の鉄道電化工事と駅の建設、鉄道近代化の工事を強力に推進するように導いた。

これとともに、生産と経営活動を科学化し、企業管理にテアンの事業体系を具現する活動もおし進めた。

金正日将軍の指導により、人民経済の主体化、現代化、科学化が力強く推進され、第 2 次 7 か年計画は完遂されるようになった。

金正日将軍は、思想、技術、文化の 3 大革命をさらに深化、発展させる闘争を賢明に導いた。

まず、金日成主席が発起した 3 大革命グループ運動の拡大、発展に大きな力をそそいだ。

3 大革命グループ運動は、政治的・思想的指導と科学技術的指導を結合し、上部が下部を実質的に援助し、大衆を 3 大革命の遂行に奮起させる新しい形式の革命指導方法である。

金正日将軍は、1974 年から 3 大革命グループを工業と農業の主要な単位のみでなく、建設、運輸など人民経済の各部門に派遣し、つづいて科学、教育、保健医療などの各部門にも派遣した。そうして、1975 年にいたって、3 大革命グループ運動は全国のすべての部門を包括する運動になった。

また、3 大革命グループにたいする指導体系を新たに確立し、1975 年 5 月には 3 大革命グループ運動にたいする党組織の指導をさらに強める措置を講じた。

そして政治的、思想的に、科学技術的に準備された中核党員と青年インテリを3大革命グループのメンバーとして派遣し、講習と方式講習、見学などを計画的におこなってかれらの政治的・実務的水準を高める措置を講じた。

金正日将軍の細心な指導のもとに 3 大革命グループのメンバーは、現場の幹部を積極的に援助し、かれらと力を合わせて思想改造、技術改造、文化改造のためのすべての活動を党の意図どおりに力強くおし進めた。3 大革命グループ運動が活発に展開される過程で、党組織の指導的役割と大衆の革命的熱意は急激に高まった。これは思想、技術、文化の3大革命をより高い段階に発展させる諸般の条件がととのったことを意味した。

金正日将軍は、現実発展の要請を洞察し、1975 年 11 月に「思想も技術も文化もチュチェの要求どおりに!」というスローガンを示し、3 大革命赤旗獲得運動を発起した。

そして 1975 年 12 月、剣徳鉱山の労働者と青山（チョンサン）里の農業勤労者が3大革命赤旗獲得運動の初ののろしを上げるようにした。こうして、この運動はすべての部門、すべての単位を包括し、全社会的な大衆運動に拡大された。

金正日将軍は、1976 年 1 月 1 日におこなった演説『今年の党活動で力点をおくべきいくつかの中心的課題

について』で、3 大革命赤旗獲得運動の本質と中心的課題など、この運動を展開するうえで指針とすべき原則的な諸問題を明らかにした。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「3 大革命赤旗獲得運動は、速度戦、思想戦の原則を具現して人びとの思想改造と経済・文化・国防建設における集団的革新運動を有機的に結びつけて力強く推進することによって、革命的大事変を迎える準備をしっかりととのえ、社会主義・共産主義建設を最大限に促す新しい大衆的運動です。

3 大革命赤旗獲得運動の中心的課題は、思想革命、技術革命、文化革命を全面的にさらにおし進めることであります」

3 大革命赤旗獲得運動は、チョンリマ作業班運動の新たな段階への発展であり、より高い形態の大衆運動である。

金正日将軍はまず、この運動を全社会的な運動として展開するために、党組織がこれにたいする指導を党活動の重要な構成部分としてとらえ、段階別の目標と課題を正しく定め、その遂行についての総括と評価を正確にするようにした。また、3 大革命赤旗獲得運動の指導書を作成して下達し、その実行のための大衆討議をおこなうようにした。そして、全党的に経験交流会と方式講習を催し、『労働新聞（ロドンシンムン）』などのマス・メディアを通じて 3

大革命赤旗獲得運動の生きた経験と成果を広く紹介、宣伝して一般化するようにした。

その結果、3 大革命赤旗獲得運動は強力に展開されて、人びとの思考方式と活動気風に転換がもたらされ、大衆の革命的熱意が高まって人間改造、技術改造、文化改造が力強く推進された。

金正日将軍は、1978 年 12 月 25 日、「われわれの方式で生きよう!」というスローガンを示し、革命と建設をわれわれの方式でおし進めるようにした。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「『われわれの方式で生きよう!』、まさにこれがこんにち、わが党が強くうちだしている戦略的スローガンです」

われわれの方式で生きることは、全社会のチュチェ思想化を促進してチュチェの革命偉業を最終的に完成するための重要な要求であると同時に、1970 年代後半期の情勢と関連して提起された切実な問題であった。

当時、共和国に反対するアメリカ帝国主義者と南朝鮮当局者の策動は日ましに露骨になっていた。一方、一部の社会主義国は修正主義に陥り、自分たちの誤った路線を他国に押しつけようと圧力を加え、いろいろと複雑な事態をつくりだしていた。

当時の情勢は、朝鮮労働党と人民が革命と建設のすべての部門で主体性を確立し、われわれの方式で生きることを求めていた。

金正日将軍は、われわれの方式で生きていくというのは、チュチェ思想の要求どおり自己の信念をもって思考し行動し、すべてを革命と人民の利益に即して自力で解決していくことを意味する、と述べている。

このスローガンの根本精神、基本的要求は、どんな風が吹いてきても、他国はどうあろうと、チュチェ思想の旗を高くかかげ、その要求どおりに生き、革命を進めるということである。

金正日将軍は、このスローガンを革命と建設のすべての分野に具現して当面の難局を打開し、新たな勝利の道を切り開いていった。

自力更生、刻苦奮闘し、われわれの方式で生きる堅忍不抜の闘争によって3大革命が推進され、社会主義経済建設がおし進められる過程で数多くの英雄的美挙が生まれ、隠れた英雄が輩出した。隠れた英雄は、名誉や報酬のためではなく、かげひなたなく党と革命、祖国と人民のために自分のすべてを尽くす、チュチェ型の共産主義的人間の典型である。

金正日将軍は、1979年10月、隠れた英雄の模範を見習う運動を発起し、この運動を党の重要な方針として示

した。

そして隠れた英雄の模範を見習う運動が 3 大革命赤旗獲得運動とともに、全社会のチュチェ思想化を実現するうえでいま一つの推進力になるよう力強く導いた。

隠れた英雄の模範を見習う運動は、その共産主義的模範の大きな感化力とけん引力によって急速に拡大し、人びとの思想的・精神的品格と仕事ぶり、幹部の活動方法と作風に画期的な改善をもたらした。

金正日将軍は、社会主義文化建設を力強く推進した。

『社会主義教育にかんするテーゼ』の実践を教育事業改善のもっとも重要な問題とし、1977 年 10 月、教育テーゼを貫徹するための思想転換方針を示した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「教育テーゼを実現するためには、思想転換をしなければなりません」

この方針は、教育事業にたいする古い観点と態度を一掃し、主体的な教育観点と態度を確立して教育テーゼを実現する賢明な方針であった。

金正日将軍は、幹部と教育者、全人民を主体的な教育観点と態度で教育テーゼの実現に奮い立たせるため、1977 年 9 月～10 月に、各道・市・郡党委員会総会、大衆大会と集会を開いて教育テーゼを支持し、それを実行

する討議をおこなうようにした。また、1978 年 9 月末〜10 月初めには 1 万 5，000 名の代表の参加のもとに全国教育者大会を催すようにした。そして、教育の内容と方法を改善するため、1978 年の夏、人民学校、高等中学校の教案を全面的に検討して改善対策を立て、高等専門学校と大学の教育内容を調べて改善方向を示した。これとともに、教員の政治的・実務的資質をいちだんと高め、教育事業で所定の教育学的過程を正確に踏み、開発授業方法と直観・実物教育、実験・実習教育を強化し、学習第一のスローガンをかかげて学習本位に進むようにした。

金正日将軍は、国の科学技術を発展させる活動をおし進めた。

当時、急速に発展する社会主義経済建設の要求に科学技術が追いつけなかった主な原因の一つは、科学者が現実に入らず、机上で研究テーマを設定し、それぞれ分散的に研究をしているところにあった。

金正日将軍は、科学者・技術者突撃隊運動を展開して科学研究で集団的革新が起こるようにした。

1975 年 9 月、科学者、技術者で「7 ・ 1 科学者・技術者突撃隊」を組織し、各工場、企業所に派遣してその生命力を検証し、それにもとづいて 1978 年 2 月には各分野の専門知識を有する科学者で「2 月 17 日科学者突撃隊」を組織して人民経済各部門の重要対象に派遣する

措置を講じた。また、人民経済のすべての単位で科学者と現場の技術者、技能工を網羅する「4 ・ 15 技術革新突撃隊」を組織して技術革新運動を強力に展開するようにした。

その結果、生産現場が科学研究活動と大衆的技術革新運動の場になり、科学研究活動と大衆的技術革新運動が密接に結びつき、科学技術が急速に発展し、その成果が生産に導入されるようになった。

科学者、技術者によりりっぱな科学研究条件をととのえるようにし、大きな科学技術の成果を達成した活動家には国家表彰と名誉称号を与えるようにした。

金正日将軍は、文学・芸術革命の成果をかためて文学・芸術の各分野を開花、発展させていった。

1978 年 1 月、数年内に中・長編小説 100 編を創作する措置を講じた。また、作家の政治的見識と創作的技量を高め、現実体験の機会を増やす対策を講じた。そうして叢書『不滅の歴史』に属する長編小説『根拠地の春』『きびしい戦域』『白頭山の麓』をはじめとする数多くのすぐれた小説が創作された。

金正日将軍は、映画革命の成果にもとづいて金日成主席の英姿を形象化した革命映画を創作することを提起し、革命映画で格式化を避け、偉大な人間、偉大な生活を芸術的にリアルに描写し、金日成主席を作品のスタイ

ルに即して形象化する問題をはじめ革命映画の創作において指針となる問題を提示した。そうして『燃える炎』『司令部を遠く離れて』『最初の武装隊伍であった話』などが創作され、革命映画の開花期が開かれた。

　また、1974 年 9 月 4 日から 6 日にかけておこなった文学・芸術部門の創作家との談話『歌劇芸術について』で歌劇革命の成果と経験を総括し、それにもとづいてチュチェの歌劇理論を集大成し、歌劇芸術をたえず発展させた。

　世界的に衰退していた従来の演劇芸術の古い殻を破り、時代にマッチした新しい革命演劇を創造する方針を示した金正日将軍は、金日成主席が創作した『城隍堂（ソンファンダン）』を演劇舞台に再現する作業を指導した。その結果、1978 年 8 月、舞台にのせられた革命演劇『城隍堂』は、従来の演劇芸術の形式と演出、演技に残っていた古い殻を破り、舞台装置と美術、音楽まで時代の美感に即して革新した、まったく新しい『城隍堂』式革命演劇のモデル作品となった。

　金正日将軍は、1974 年 5 月 7 日、朝鮮記者同盟中央委員会第 3 期第 5 回拡大総会での結語で、党の出版・報道手段の性格と使命、任務を新たに示し、新聞革命、報道革命、出版革命を起こす闘争を賢明に導いた。

　こうして、『労働新聞』からまず社説革命、新聞革

命を起こし、つづいて出版・報道活動全般で古い枠が一掃されて革命的転換が起こり、党の出版・報道手段は全社会のチュチェ思想化に寄与する思想的武器としての使命を果たすようになった。

金正日将軍は、人民保健医療事業をさらに発展させるために、党の予防医学方針を貫き、高麗(コリョ)治療法を広く導入し、医療サービスで革新を起こし、医科学技術と医療器具工業を世界的すう勢にそって発展させた。

金正日将軍は、スポーツの大衆化方針を実行することに基本をおいて国のスポーツ発展に格別な関心を払った。

スポーツを大衆化するために、勤労者のあいだで各種の大衆スポーツ活動を活発におこない、祝日や記念日には種目別、部門別スポーツ競技大会を広く催すようにし、学校体育を強化し、体育クラブと体育サークルを通じての青少年スポーツを積極的に発展させた。これとともに、専門スポーツの発展のために思想戦、速度戦、技術戦、闘志戦の方針をかかげて主体的な戦術体系にもとづく訓練を強化し、多くの種目を世界的レベルに引きあげるように導いた。

金正日将軍は、1975 年 7 月 1 日、剣徳鉱山を現地指導する過程で、労働者階級の大集団が革命的文化を創造して都市と農村に普及する方針を示し、勤労者が働き、生活するすべてのところを文化的にととのえ、社会主義

的生産文化と生活文化を確立するように導いた。

金正日将軍は、全軍をチュチェ思想化するという革命的方針を示し、それを実現する闘争を賢明に指導した。

全軍のチュチェ思想化は、人民軍を不敗の革命武力に強化する必須の要求であり、全社会のチュチェ思想化を成功裏に実現する保障である。

金正日将軍は、1975 年 1 月 1 日、朝鮮人民軍総政治局の責任幹部との談話で全軍チュチェ思想化の方針を示した。

全軍をチュチェ思想化するということは、すべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な戦士にし、軍建設と軍事活動をチュチェ思想にもとづいておこなうことを意味する。金正日将軍は、全軍をチュチェ思想化して人民軍を領袖の軍隊、党の軍隊につくりあげることが軍建設の総体的任務である、と述べている。

全軍チュチェ思想化の方針が示された結果、金日成主席の軍建設思想の純潔を守り、全社会のチュチェ思想化の要求に即応して人民軍を不敗の革命武力に強化する総体的方向と基本方途が明らかにされ、人民軍を名実ともに領袖の軍隊、党の軍隊につくりあげる保障がもたらされた。

金正日将軍は、全軍のチュチェ思想化を実現するために、人民軍の党政治活動を確固と優先させるようにし

た。1976 年 1 月 1 日、「金日成同志のために一命を賭してたたかおう!」というスローガンを示し、それに即して思想教育をおこなうようにした。そして抗日の女性英雄金正淑(キムジョンスク)同志を見習う運動を強化する一方、抗日革命闘士呉仲洽(オジュンフプ)同志を見習う運動を展開する方針をうちだした。また、人民軍の各部隊で「訓練も学習も生活も抗日遊撃隊式に!」というスローガンをかかげて革命伝統教育を強化し、それを実生活に具現する闘争をくりひろげるようにした。

1979 年 2 月、朝鮮人民軍軍団(軍種、兵種)、師(旅)団政治部の宣伝・扇動部長会議および講習参加者に送った書簡で、全軍のチュチェ思想化のための政治・思想教育の内容と方法を改めて全面的に示した。人民軍の政治・思想活動で形式主義、図式主義、行政化の古い殻をうちこわして抗日遊撃隊式の宣伝扇動方法を取り入れ、すべての宣伝と扇動を軍隊らしく火線宣伝、火線扇動に切り換えるようにした。

金正日将軍は、全軍のチュチェ思想化の要求に即応して人民軍を軍事技術的に準備させることに力をそそいだ。

人民軍指揮官の指揮能力を高め、軍事組織系統と作戦指揮系統を改編し完成する問題、軍人の軍事技術的資質を向上させる問題、人民軍の武力装備をより現代化する問題などを重要な課題として提起し、それらをともに

おし進めるようにした。

まず、人民軍の指揮官が主体的戦法を研究して精通する一方、外国の戦争経験も主体的立場に立って研究するようにした。1979 年 12 月には、各級参謀部の役割を高める対策を立てて人民軍の全般的指揮系統を強化し、指揮通信手段を現代化するようにした。

そして人民軍が主体的な戦術、射撃、体育訓練を強化する一方、部隊の打撃力と機動力の向上に基本をおいて武力装備を改善し、戦闘技術機材を現代化、国産化するよう導いた。

その結果、人民軍の軍事技術的準備においては画期的な前進がもたらされた。

金正日将軍は、全軍のチュチェ思想化を推進するため、人民軍内における共産主義的大衆運動の発展に深い関心を払い、1975 年 12 月初には全軍に 3 大革命赤旗獲得運動の火を点じ、この運動を赤旗中隊運動、赤旗前衛中隊運動と密接に結びつけて推進した。

金正日将軍の指導のもとに全軍チュチェ思想化の方針が貫かれることによって、人民軍はチュチェの革命偉業を軍事的に保障する革命武力に強化され、金日成主席の軍隊、党の軍隊としての面貌をりっぱにととのえるようになった。

金正日将軍は、1970 年代中期の内外情勢にたいする分析にもとづいて、祖国統一をめざす闘争を導いた。

1975 年、ベトナム戦争で敗北して東南アジアから追い出されたアメリカ帝国主義は、南朝鮮をかれらの「前線防衛地域」と宣布し、核兵器を大々的に持ち込む一方、1976 年からは北侵を企む核試験戦争であるチーム・スピリット合同軍事演習をくりひろげ、それを毎年エスカレートさせた。南朝鮮執権者はアメリカ帝国主義の差し金のもとに「南侵の脅威」説を流し、軍事境界線上の240 余キロ区間の南側地域にコンクリート障壁を構築して北南対決をあおり、北南対話を故意に破綻させた。そのため、北南関係は再び 1972 年 7 ・ 4 共同声明の発表以前の状態に逆もどりした。

金正日将軍は、情勢の変化を深く洞察し、祖国統一の主体的力量を強化する活動をおし進めた。

金正日将軍は、つぎのように述べている。

「われわれは、あくまでもわれわれの主体的力量に依拠すべきであり、自力でアメリカ帝国主義を追い出して祖国を統一しなければなりません。そのためには、われわれの主体的革命力量を最大限に強化しなければなりません」

祖国統一の主体的力量を強化するのは、統一勢力と分裂主義勢力との闘争で勝利を達成するための保障である。

金正日将軍は、祖国統一の主導的力量である北半部の革命力量を政治的、経済的、軍事的にいっそうかためることに努めた。また南朝鮮の統一愛国勢力の成長に深い関心を払い、団結した力で統一偉業の達成に奮い立つようにした。その結果、北半部の革命力量は強化され、祖国統一のための南朝鮮の青年学生と各階層人民の闘争はますます組織化され、その規模と水準も急速に成長した。

金正日将軍は、海外同胞も祖国統一偉業に大いに寄与する主体的力量として結束した。

海外同胞に金日成主席を領袖として戴いた民族の誇りをいだかせ、分断された祖国の苦痛と統一の切実さを深く認識させるために祖国の代表団、芸術団をたびたび派遣する一方、祖国を訪問した海外同胞との活動に力を入れるようにした。その結果、広範な海外同胞が祖国統一の闘争団体を組織して祖国統一偉業の実現に立ち上がり、ついに海外同胞の幅広い統一戦線が形成され、海外在住の保守政客や宗教家、亡命した南朝鮮かいらい政府の高官も祖国の自主的統一を支持するようになった。

金正日将軍は、祖国統一をめざす闘争にたいする国際的連帯を強化する活動に深い関心を向けた。

1977 年 6 月に「朝鮮の自主的平和統一のための国際連絡委員会」が組織されたのをはじめ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの 70 余か国に「朝鮮人民との連帯

委員会」「朝鮮統一支持委員会」が組織され、1979 年の 1 年間だけでも朝鮮の自主的統一を支持する国際的署名運動に 128 か国と 31 の国際機構、地域機構で 10 億 8，000 万名が参加した。

金正日将軍は、祖国統一の主体的力量が強化され、国際的環境が有利に変わった新たな状況に合わせて幅広い北南対話を主動的に推進するよう導いた。

1977 年 1 月、共和国北半部の 18 の政党・大衆団体連席会議で、北と南の団結した力で祖国の自主的平和統一を早めるための提案と、それを討議するための北南政治協商会議の招集を基本内容とする手紙を採択して南朝鮮の広範な政党、大衆団体、各階層の人民、海外同胞に送るようにした。

1979 年 1 月には祖国統一民主主義戦線中央委員会の声明を発表して、北南間の不信と反目を解消し、民族の和解と団結のための主動的措置を公布させ、幅広い対話と協商を実現させるため積極的にたたかうようにした。

国の自主的平和統一のための朝鮮労働党と共和国政府の終始一貫した立場と努力は内外に広く知られ、全民族の統一熱望と世界の関心はいちじるしく高まった。

金正日将軍はまた、朝鮮人の住んでいる世界各地域で、在外同胞運動が同胞大衆の民主主義的民族権利を守り、祖国の自主的平和統一をめざすたたかいを積極的に

くりひろげ、世界の進歩的人民との連帯を強化するため積極的にたたかう愛国的民主主義運動に発展するよう深い関心を払った。

その結果、海外同胞組織と同胞のあいだで金日成主席とチュチェ思想を奉じ、朝鮮民族の大きな誇りと朝鮮人の精神をもって祖国統一偉業に寄与する運動が活発になり、海外朝鮮人運動は新たな高い段階に発展した。

1970 年代の中期、反帝自主勢力の成長に恐れをなした帝国主義者と支配主義者は、新興諸国人民の自主的発展の道を阻むための干渉と破壊活動を強行する一方、これらの国の自主権をはなはだしく踏みにじった。また、革命を進める諸国を離間させて互いにたたかわせ、漁夫の利を得ようと狡猾に策動した。

こうした実情のもとで、反帝自主勢力を強化することは、支配主義勢力にたいする進歩的勢力の決定的優勢を保ち、帝国主義者の反革命的策動を粉砕するうえで大きな意義をもった。

金正日将軍は、反帝自主勢力との連帯を強化するため、チュチェ思想の宣伝の深化に関心を払った。

その結果、金日成主席の著作とチュチェ思想の解説図書が大々的に普及された。世界の主な地域の進歩的団体と出版界の人士は、金日成主席の著作翻訳委員会と出

版委員会を設けて毎年、数多くの著作を翻訳、出版した。1980 年 1 月～10 月のあいだだけでも、金日成主席の著作は 50 か国の民族語で 2，443 万余部出版され、124 か国の 1，000 余種の新聞、雑誌に掲載された。

こうして、チュチェ思想信奉者の隊伍は急激に拡大され、1970 年代末にいたっては世界のほとんどすべての国にチュチェ思想研究組織が結成された。それらの組織には政界、言論界、学界の人士とレジスタンス部隊の闘士、青年学生ばかりでなく、党と政府の高位人士も網羅されている。

チュチェ思想の研究、普及が国際的規模で進められるなかで、1978 年 2 月にラテンアメリカチュチェ思想研究所が設けられ、同年 4 月には東京に事務局をおくチュチェ思想国際研究所が創立され、1980 年 9 月にはアジア地域チュチェ思想研究所が結成された。そして、これらの組織では『チュチェ思想研究』『自主性』『自主の旗』など各種の定期刊行物を発行している。

また、チュチェ思想にかんする国際討論会が平壌（ピョンヤン）、トーゴ、マダガスカル、インドなど多くの国で盛大に開催され、チュチェ思想にたいする研究はしだいに学術的な認識段階から革命実践の指針を探究する高い実践段階へと発展した。

金正日将軍は非同盟運動の拡大発展にも深い関心を

払った。

1975 年 8 月には、朝鮮民主主義人民共和国がこの運動の正式構成国として加盟する措置を講じ、多くの会議で採択された決議を誠実に履行するようにした。

金正日将軍は、反帝自主勢力を強化するために、国際共産主義運動の団結と自主的発展のための原則的問題を示し、その実現のために努力を傾けた。

1979 年 1 月 1 日、国際共産主義運動が自主の道へ確固と進むためには、各国の党と人民があらゆる形態の支配と従属に反対し、自主性を擁護し、諸党の相互関係の規範を厳格に守るべきであることを強調し、朝鮮がその模範を示すように導いた。また、対外活動の幅を広げてヨーロッパと世界各地域の資本主義国の共産党、労働者党との接触と交流も積極的に発展させた。

金正日将軍の指導によって、1970 年代後半期、反帝自主勢力の成長にともない、朝鮮労働党と共和国政府の対外的地位もいちじるしく高まった。

4

（1980 ・ 10〜　　　　　）

1980 年代に入って朝鮮労働党と人民には、党をチュチェ型の革命的党にいっそう強化発展させ、全社会のチュチェ思想化を早期に実現するための新たな闘争綱領をかかげるべき歴史的課題が提起された。

1979 年 12 月に開かれた党中央委員会第 5 期第 19 回総会は、党創立 35 周年にあたる 1980 年 10 月に朝鮮労働党第 6 回大会を招集する決定を採択した。

金正日将軍は、第 6 回党大会を朝鮮労働党と朝鮮革命の発展に新たな里程標をしるす歴史的な大会にすべく精力的な活動を展開した。

1980 年 1 月 8 日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の責任幹部協議会で、第 6 回党大会を迎えて党をいっそう強化し、革命と建設で新たな高揚を起こす具体的な課題を示し、同年 6 月には党中央委員会のスローガンを発表して、党大会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎える闘争へとすべての党員と勤労者を奮い立たせた。

党大会をひかえ、すべての党組織が党の隊伍をうち

かため、各階層の大衆を党と領袖のまわりにかたく結集するとともに、「100 日間戦闘」(7・1～10・8)をくりひろげて 1980 年度の人民経済計画を繰り上げて完遂するようにした。一方、蒼光(チャングァン)通りと平壌(ピョンヤン)産院、ヘルス・センター蒼光院[23]など労働党時代を輝かす数多くの記念碑的建造物の建設を党大会以前に終えるよう導いた。

また、党大会とその祝賀行事を最上の水準で準備するよう具体的に指導する一方、大会文書の準備に特別な関心を払った。

そしてチュチェ思想にもとづいて党の性格と指導思想、党の革命伝統と最高目的、党建設と党活動の原則を新たに示し、新しい党規約を名実ともにチュチェ思想を指導思想とする朝鮮労働党の真の規約として完成するようにした。

金正日将軍の指導により、朝鮮労働党第 6 回大会は十分な準備のもとに、1980 年 10 月 10 日から 14 日にかけて平壌で開催された。

金日成主席は党大会の報告で、総括期間に革命と建設で達成された勝利と経験を総括し、全社会のチュチェ思想化を朝鮮革命の総体的任務として規定し、その実現のための課題と遂行方途を全面的に示した。

金正日将軍は、党大会で党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会政治局委員、党中央委員会書記、

党中央軍事委員会委員に選出された。

第 6 回党大会は、朝鮮労働党を永遠にチュチェの党として強化発展させ、チュチェの革命偉業を代を継いでりっぱに継承し、完成させる党の基礎をかためるうえで新たな転機となる歴史的な大会であった。

金正日将軍は党大会後、全党と全人民を党大会の決定実行へと奮い立たせた。

1980 年 12 月 3 日、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部、平壌市党委員会の責任幹部協議会でおこなった演説『党組織に提起されるいくつかの課題について』と、1981 年 4 月 3 日、道党責任書記協議会でおこなった演説『道・市・郡党委員会に提起される課題』で、党大会の決定を実行するための課題を示した。

金正日将軍は党大会の決定を実行するためには、党活動を革命発展の新しい要請に即応して発展させねばならず、ここで重要なのは金日成主席の教えと党の方針を無条件実行する気風を確立し、党の基礎を築く活動をひきつづきおし進め、党員と勤労者にたいする思想教育を強化することである、と述べた。そして、隠れた英雄の模範を見習う運動と 3 大革命グループ運動を深化、発展させて思想、技術、文化の 3 大革命を推進すべきであると強調した。

金正日将軍によって、全社会のチュチェ思想化を力

強く推進する課題とその実現方途が示されて、第6回党大会の決定実行の道が開かれるようになった。

金正日将軍は、金日成主席の誕生 70 周年を契機に、金日成主席によって創始されたチュチェ思想を体系化し、集大成する著述に心血をそそぐ一方、『金日成著作集』をはじめ金日成主席の著作、革命活動史と伝記、革命活動を収録した記録映画や革命映画、長編小説を創作、出版するようにした。

また、チュチェ思想塔と凱旋門を大記念碑として建立することを発起し、自らその敷地を定め、形成方向を示し、その建設の全過程を具体的に指導した。こうして、史上はじめて偉大な革命思想、チュチェ思想を形象化した塔と凱旋門が建立された。

そして平壌に一つの都市に匹敵する紋繡(ムンス)通りと金日成競技場、人民大学習堂、万景台(マンギョンデ)遊戯場、アイススケート・リンク、平壌第 1 百貨店などの記念碑的建造物を建て、地方都市と農村に住宅と文化厚生施設を大々的に建設するよう指導した。

金正日将軍は、1982 年 3 月末に全国チュチェ思想討論会を開き、参加者たちに著作『チュチェ思想について』を送った。

金正日将軍の深い関心のもとに、4 月 9 日から 11 日にかけて、インドのニューデリーではチュチェ思想にか

んする国際討論会がおこなわれた。

金日成主席の誕生 70 周年を祝うために訪朝した 118 か国の使節の参加のもとに、平壌では記念報告大会と多彩な祝賀行事が催された。祝賀行事は世界の多くの国でも各種の形式で広くおこなわれた。これらの祝賀行事は、金日成主席のまわりに一心団結した人民の威力を内外に誇示し、世界の自主勢力の統一団結を強化する重要な契機となった。

金正日将軍は、チュチェ思想を発展させる思想・理論活動を精力的に展開した。

チュチェ思想を深化、発展させるのは、朝鮮革命発展の切実な要求であった。チュチェ思想を深化、発展させてこそ、朝鮮労働党をチュチェ型の党としていっそう強化発展させ、革命と建設をチュチェの道に導き、全社会のチュチェ思想化に新しい前進をもたらすことができた。またそうしてこそ、日和見主義の思潮と帝国主義者の反社会主義策動を粉砕し、社会主義偉業を固守することができた。

金正日将軍は、時代の要請を深く洞察して 1982 年 3 月 31 日、『チュチェ思想について』を発表した。

『チュチェ思想について』は、チュチェ思想を全面的に体系化して集大成し、その諸原理を発展させた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「…わたしが朝鮮人民の土壌に種を播き育ててきたチュチェ思想を、金正日同志が生い茂った林につくり、豊穣な実りを得られるようにしたといえます」

金正日将軍は同著で、チュチェ思想の創始と哲学的原理、社会・歴史原理、指導原則、歴史的意義について明らかにし、その思想的・理論的内容を発展させた。

まずチュチェ思想は、金日成主席が歴史の新しい時代の要請を洞察して創始した独創的な思想であり、哲学的原理、社会・歴史原理、指導原則で構成されていることを明らかにした。

そしてチュチェ思想は、従来のすべての哲学とは違って、人間を基本にして哲学の根本問題を提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという新しい哲学的原理を明らかにしたとし、人間の本質的特性にかんする主体的な見解をさらに発展させるとともに、チュチェの哲学的原理にもとづいて解明された世界にたいする新しい見解と観点と立場を科学的に定義づけた。

また、社会・歴史原理のなかでもっとも基礎的で起点となる原理である、勤労人民大衆は歴史の主体であるという原理をはじめ、人類史は自主性の実現をめざす人民大衆の闘争の歴史であるという原理、社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動であるという原理、革命闘争において

決定的役割を果たすのは人民大衆の自主的思想・意識であるという原理など、社会・歴史の主要な諸原理を科学的に体系化し、その内容を全面的に発展させた。

ついで、チュチェ思想の指導原則は、自主的立場を堅持する原則、創造的方法を具現する原則、思想を基本にしてとらえていく原則などで構成されていることを明示し、チュチェ思想の指導原則の具現で提起される原則的問題に全面的な解答を与えた。

終わりに、チュチェ思想の歴史的意義は、チュチェ時代[24]の真の革命的世界観を明らかにし、労働者階級の革命理論の発展において新たな高い段階に到達したところにあり、朝鮮革命と自主の新しい世界を創造するわれわれの時代の革命実践に大きな変革をもたらしたところにある、と述べている。

金正日将軍によってチュチェ思想が全面的に体系化され深化された結果、革命と建設の指導思想としてのチュチェ思想の威力は比べようもなく高まった。また、労働者階級の革命的党と人民大衆はチュチェ思想を生と闘争の教科書として受け入れ、人類の自主偉業の実現に奮い立つようになった。

金正日将軍は、1980 年代の後半期にもチュチェ思想を発展させる思想・理論活動をたえず展開した。

『チュチェ思想教育における若干の問題について』

(1986 年 7 月 15 日)『チュチェの革命観を確立するために』(1987 年 10 月 10 日)『チュチェ哲学にたいする正しい観点と理解をもつために』(1990 年 10 月 25 日)『チュチェ哲学は独創的な革命哲学である』(1996 年 7 月 26 日)などの諸著作で、独創的な思想と理論によってチュチェ思想をさらに発展させて豊富にし、その生命力を論証した。これらの著作で、チュチェ思想とマルクス・レーニン主義との関係を理解するうえで独創性を基本にしながら継承性を結合して見なければならないとし、チュチェの社会・歴史原理と革命理論をさらに発展させてチュチェの社会・歴史原理で核心をなす革命の主体にかんする理論、領袖、党、大衆の統一体である社会的・政治的生命体にかんする理論を全面的に展開した。

『チュチェの革命観を確立するために』『すべての人が英雄のように生き、たたかおう』などの著作では、チュチェの革命観と人生観にかんする理論を新たに発展させて豊富にした。

この他にも数多くの著作を発表して、社会主義社会の性格と優越性、その発展の合法則性にかんする問題、党、国家、勤労者団体の建設にかんする問題、革命と建設にたいする党の指導にかんする問題、現代帝国主義の特徴と全世界の自主化を実現する戦略戦術にかんする問題など数多くの理論的・実践的問題を新たに解明するこ

とによって、チュチェ思想の宝庫を豊富にした。

金正日将軍は朝鮮労働党第 6 回大会以後、党の基礎を強化する活動を推進した。

党の基礎構築は、領袖の革命偉業を継承する問題が前面に提起された時期にいっそう切実な問題となる。革命偉業の継承期に党の基礎を強化してこそ、革命の代がかわっても領袖の切り開いた革命偉業を紆余曲折なく完成していくことができる。

金正日将軍は党の基礎を強化する問題の重要性にかんがみてすでに 1974 年 2 月、党の基礎構築の方針を示し、党建設と党活動のすべての分野において党の指導体系を確立していった。こうして、1970 年代に党の基礎を強化する活動では少なからぬ成果が達成された。

1980 年 12 月の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部、平壌市党委員会の責任幹部協議会と、1981 年 4 月の道党責任書記協議会での演説で、党の基礎を強化する活動をひきつづき力強く展開する課題を示し、その実現のための活動を積極的に推進した。

金正日将軍は党の基礎を強化するため、幹部陣容の強化に深い関心を払った。

党の指導は幹部を通じておこなわれるので、党に忠実な革命の精鋭分子で幹部陣容をかためることは党の基

礎構築においてもっとも重要な意義を有する。

それで、党への忠実性を基本にし、若くて能力のある人を登用して幹部陣容を将来を見通してかため、幹部事業の体系と秩序を厳守して幹部陣容の純潔を保障するようにした。また、党の幹部養成事業を改善し、後続幹部陣容を強化した。

金正日将軍は党の基礎を強化するため、党内に一致して動く革命的規律を確立し、幹部と党員の党生活をさらに強化し、第 6 回党大会で採択された新しい党規約にたいする全党的な学習と 1982 年の新しい党員証の授与を契機に、党員の党生活水準をいちだんと高めた。

また、党の基礎をかためる活動は本質において、党員と勤労者の党にたいする忠実性を培う活動であるとし、党員と勤労者、青少年のあいだで党にたいする忠実性を信念、信義とする思想教育を強化するようにした。1981 年 10 月には「80 年代の金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）[25]になろう!」というスローガンを示し、朝鮮革命のれい明期に青年共産主義者が身につけていた領袖への絶対的な忠実性の輝かしい伝統を受け継いでいくようにした。

こうして、1983 年末にいたり、党の基礎構築の歴史的課題はりっぱに実現された。

党の基礎構築の完成、これはチュチェの党建設偉業の実現における金正日将軍の大きな功績である。

金正日将軍は 1982 年 10 月 17 日、チュチェの党建設理論を新たに発展させた著作『朝鮮労働党は栄えある「トゥ・ドゥ[26]」の伝統を継承したチュチェ型の革命的党である』を発表した。

この著作では、朝鮮労働党建設の歴史的経験と労働者階級の革命的党がそなえるべき真の面貌、党をチュチェの革命的党に強化、発展させる原則的問題を明らかにした。党建設と党活動で提起される理論的・実践的問題に完璧な解答を与えたこの著作は、朝鮮労働党を永遠に金日成主席の党に強化、発展させ、チュチェの革命偉業をりっぱに完成するうえで堅持すべき指導指針である。

朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は 1982 年 2 月、朝鮮労働党をチュチェ型の革命的党に強化、発展させ、3 大革命を力強くおし進め、チュチェの革命偉業を継承、発展させるうえで大きな業績を積み上げた金正日将軍に共和国英雄称号を授与する政令を発表した。

金正日将軍は、1980 年代の社会主義経済建設に新たな転換をもたらし、主体的な社会主義経済管理システムを擁護し貫徹する闘争を指導した。

当時、社会主義経済建設に新たな転換をもたらしてこそ、第 6 回党大会で示された社会主義経済建設の新しい展望目標を達成し、全社会のチュチェ思想化を高い段

階でおし進めることができた。

金正日将軍は、社会主義経済建設に転換をもたらすために、1982 年 6 月 8 日の党中央委員会責任幹部協議会で、1956 年 12 月総会を契機にチョンリマの大高揚を起こしたように、社会主義経済建設で新たな大高揚を起こすことを呼びかけ、全党と全人民を「80 年代の速度」創造運動へと決起させた。

「80 年代の速度」創造運動は、チョンリマの大高揚期に朝鮮人民が発揮した革命精神を継承し、速度戦の原則を全面的に具現して、社会主義経済建設に新たな高揚をもたらす大衆的進軍運動であった。

金正日将軍は 1982 年 7 月 9 日、金策(キムチェク)製鉄連合企業所の労働者が「80 年代の速度」創造運動ののろしを上げるようにした。そして全党と全人民が「チョンリマの大高揚期の勢いで『80 年代の速度』を創造しよう!」というスローガンをかかげてこの運動に決起させた。

また、「80 年代の速度」創造運動を展開するための組織・政治活動を強化し、エネルギッシュに指導した。

1982 年 6 月に剣徳(コムドク)鉱業総合企業所第 3 選鉱場の建設で立体戦をくりひろげて「80 年代の速度」を創造するようにする一方、人民経済部門別会議を招集し、すべての部門、すべての単位で「80 年代の速度」創造運動が展開されるようにした。

金正日将軍の大胆でスケールの大きい作戦とエネルギッシュな指導によって、わずか1年のあいだに世界有数の剣徳第3選鉱場が建設され、人民経済の各部門で第2次7か年計画が成功裏に推進された。

金正日将軍は、金日成主席が示した4大自然改造の課題である30万ヘクタールの海面干拓と20万ヘクタールの新しい土地開墾、西海（ソヘ）閘門と泰川（テチョン）発電所の建設へと全党と全人民を立ち上がらせ、この過程で「80年代の速度」創造運動をさらに高い段階に発展させた。

西海閘門の建設は、8キロの外海をせきとめ、3つの閘室と数十の水門を有する大ダムを築く大規模の工事であった。

金正日将軍は1981年5月、閘門建設を人民軍に担当させ、立体戦、電撃戦で工事を短期間に完成する大胆でスケールの大きい作戦を展開し、数回にわたって建設現場を訪れて軍人を激励した。

こうして、西海閘門はわずか5年のあいだに国内の資材と設備、技術で時代の記念碑として建設された。

金正日将軍は、主体的な経済管理システムを擁護し、貫徹するよう精力的に導いた。

主体的な経済管理システムを擁護し、貫徹することは当時、一部の社会主義国で経済を資本主義的方法で管理運営する改良主義的傾向があらわれていた事情と関連

して、緊急課題となっていた。

金日成主席は 1981 年 4 月、党中央委員会第 6 期第 3 回総会で、現実発展の要請に即応してテアンの事業体系を貫徹するよう強調した。

金正日将軍は、各級党組織にこれを実行する対策を討議させ、工場、企業所がテアンの事業体系の実行状況総括を正しくおこない、その要求どおりに活動するよう導いた。

現実発展の要請に応じてテアンの事業体系を貫くため、金正日将軍は 1985 年 5 月、行政・経済機関の機構を統合して行政・経済委員会を設けることにした党の措置が効果を発揮できるようにすることに深い関心を払った。また、1985 年 11 月、各種形態の連合企業所を新設する措置を講じ、それらの連合企業所にテアンの事業体系の要求どおり企業管理をさせるため大安（テアン）重機連合企業所をモデルケースに設定し、その経験を全国に一般化するようにした。

金正日将軍は、経済幹部と生産者大衆が独立採算制にたいする正しい認識をもち、それを正確に実施できるようにするため研究討論会と経験交流会を広く催す措置を講じ、1986 年 1 月には独立採算制実施のモデルケースをつくり、その経験を各工場、企業所に一般化させた。

また、農業の管理運営で集団主義的原則を固守する

ため、分組管理制と作業班優遇制を着実に実施するようにした。1986 年 5 月と 12 月の党中央委員会書記局会議をはじめ多くの機会に、社会主義農村の進む道は社会主義農村テーゼが示したとおり、より現代化、工業化した大規模の共産主義的経営であると強調した。そして、分組管理制と作業班優遇制の優越性を発揮させる積極的な措置を講じた。

その結果、農業部門では集団主義的原則にもとづく分組管理制が実施され、その優越性がさらに高く発揮された。

金正日将軍は、人民政権を強化し、勤労者団体の活動を改善する活動を賢明に指導した。

金正日将軍は、1982 年 2 月から第 7 期、第 8 期、第 9 期の最高人民会議代議員に選出された。

1980 年代に人民政権活動を改善するのは、第 6 回党大会の決定を実行し、全社会のチュチェ思想化をおし進めるべき革命発展のさし迫った要求であった。

金正日将軍は、人民政権の主権的機能を高めるため、主権機関内に党の唯一思想体系と指導体系を確立するようにし、整然とした下部の掌握・指導体系を立てた。

そして、人民政権が人民の生活に責任をもつ戸主としての役割をりっぱに果たすよう深い関心を払った。

1981 年 9 月には人民政権機関が食肉生産に力をそそぐようにし、1982 年 11 月には住民に食用油、タマゴ、魚類、野菜、みそ・しょう油など 5 つの主要副食物を十分に供給すべく金日成主席の教えを人民政権機関が責任をもって実行するよう導いた。

金正日将軍は、人民政権の法的統制の機能と役割を高め、社会主義順法生活にたいする指導を強化することに深い関心を払った。

全社会に順法気風を確立するためのさまざまな措置を講じ、1982 年 12 月 15 日に『社会主義順法生活を強化するために』を発表し、社会主義順法生活を強化する課題と方途を示し、それを実行する活動を導いた。

順法気風の確立を大衆的な運動として展開するため、1983 年 12 月に「模範順法郡」称号獲得運動を発起し、平安(ピョンアン)南道平原(ピョンウォン)郡をモデルケースにし、その経験を一般化させ、社会主義順法生活指導委員会と社会安全、司法・検察機関の役割を高める対策を講じた。

金正日将軍の指導のもとに人民政権がいっそう強化され、その機能と役割が高まった結果、共和国政権にたいする人民の信頼は非常に高まった。

金正日将軍は、全社会のチュチェ思想化を促進すべき革命発展の要請に即応して勤労者団体の活動を改善することに深い関心を向けた。

社会主義労働青年同盟第 7 回大会と職業総同盟第 6 回大会をはじめ勤労者団体の大会を、その活動に新たな転換をもたらす重要な契機とし、同盟組織を党の指導に限りなく忠実であるように導いた。

さらに、勤労者団体の幹部陣容を党に忠実で能力のある中核でかため、かれらの政治・実務水準を高めるためのいろいろな措置を講じた。

1984 年 5 月には全国職業同盟活動家講習会を催して書簡『職業同盟の活動をさらに強化するために』を、1985 年 12 月には全国農業勤労者同盟活動家講習会を催して書簡『農業勤労者同盟の活動をさらに強化するために』をそれぞれ送った。こうして、職業同盟と農業勤労者同盟の幹部の政治・実務水準の向上と活動改善の画期的な転機をもたらした。

金正日将軍は、勤労者団体の各組織が同盟員のあいだで党と領袖にたいする忠実性教育と革命伝統教育、社会主義的愛国主義教育を着実におこなうようにした。また、「80 年代の速度」創造に奮い立った同盟員のあいだで党の経済政策宣伝と生産扇動を活発に展開し、各種の大衆運動をおし進めるようにした。その結果、いたるところで社会主義的競争運動と技術革新運動、青年突撃隊運動、分組、作業班、農場、郡を単位とする各種の模範単位創造運動が広くおこなわれた。

そして、勤労者団体の活動にたいする党の指導を強化し、勤労者団体の活動を発展する現実に即応して改善するようにした。

金正日将軍の指導によって、勤労者団体組織はその任務を遂行し、革命隊伍を磐石のようにかためる活動を深化させていけるようになった。

金正日将軍は、1970 年代の文化建設での成果を強固にする活動を 80 年代にもひきつづき指導した。

金正日将軍は独創的な教育革命方針を提示し、教育事業に転換をもたらすことに力をそそいだ。

教育革命は、育ちゆく新しい世代を革命の継承者に準備させ、チュチェの革命偉業を継承し、完成すべき朝鮮革命のさし迫った要求であり、教育の質的水準が現実発展の要請に追いついていない実態から提起される切実な問題であった。

1984 年 7 月 22 日、全国教育活動者会議の参加者に送った書簡『教育事業をさらに発展させるために』では、教育革命を起こす方針を示し、それを実現する活動を指導した。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「われわれは革命発展の新たな要請に即応して教育革命を起こし、学校教育事業を全般的に改善し教育の質

を決定的に高めて、新しい世代を有能な革命的人材にりっぱに育てあげ、われわれの教育が国の科学技術の発展と社会主義経済建設によりりっぱに貢献するようにしなければなりません」

中等一般教育の質の向上を教育革命の中心的課題の一つとし、平壌第1高等中学校を教育機関のモデル校にし、1984年4月28日に同校を現地指導する際、中等一般教育に質的変化をもたらさなければならないと強調した。そして、高等中学校で社会・政治課目と自然基礎課目、理論教育と実践教育を適切に組み合わせるようカリキュラムを正しく作成し、発展する現実に即応して教科書を改訂するようにした。

1985年4月と7月に普通教育部門で外国語教育を強化する画期的措置を講じ、生徒の幅広い学習と、創造的な応用能力と学習熱意の向上に役立つよう授業法と試験方法を直すようにし、1987年から「7・15最優等賞」獲得運動を展開するようにした。

教育部門で技術者、専門家の養成事業を改善するために、金日成総合大学をはじめ主要大学をりっぱにととのえ、その経験を一般化して他の大学をもりたてるようにした。また、高い技術・技能をもつ現場の技術者を多く養成するために、1、2年のあいだに40余校の単科大学を増設するようにした。

こうして、1980 年代に 100 余校の大学が新設され、1993 年には 173 万余のインテリ大集団を擁するようになった。大学教育の質的水準が高まり、大学の科学研究活動が改善されるにつれて 20 代、30 代の学士（修士級の学位）、博士をはじめ数多くの科学技術人材が育った。

金正日将軍は、国の科学技術を新たな高い段階に発展させる活動を力強くおし進めた。

科学技術を急速に発展させてこそ、人民経済の主体化、現代化、科学化を促進して、社会主義の物質的・技術的土台を強固にし、人民生活をたえず向上させることができた。

1985 年 8 月 3 日、党中央委員会の責任幹部におこなった演説『科学技術をさらに発展させるために』で、社会主義建設の現実的要請と現代科学技術の発展すう勢に即して、科学技術を高い段階に発展させる具体的な課題と方途を示した。

また、科学技術の発展において重要なのは、原料と燃料、動力問題と機械設備の現代化で提起される科学技術上の問題を解決し、人民経済各部門の生産技術工程と生産方法、経営活動を新たな科学的土台の上に引き上げる研究を深め、基礎科学を発展させて新しい科学技術分野を開拓することであると指摘した。

そして、国の科学技術を最短期間のうちに世界的レ

ベルに引き上げるため、1986 年 2 月と 1988 年 3 月の党中央委員会総会で、その対策的問題を討議するようにし、全国学位・学職所有者会議と全国発明家大会を開催し、1986 年から毎年、全国科学技術祭典をおこない、科学者、技術者の責任感と役割を高めるようにした。

1988 年 3 月に開かれた党中央委員会第 6 期第 13 回総会では科学技術発展 3 か年計画（1988～1990）を提示し、同年 8 月 31 日の科学部門の責任幹部会議では電子・金属・レーザー工学をはじめ重要な科学部門を全面的に発展させることを強調した。

1995 年 4 月 28 日には国家科学院を訪れ、電子工業をはじめ最先端科学技術を急速に発展させることなど国の科学技術の向上で提起される綱領的課題を示し、科学者、技術者によりりっぱな科学研究条件を保障する対策を講じた。

金正日将軍の指導によって、国の科学技術は人民経済の主体化、現代化、科学化に積極的に寄与する主体的な科学技術に急速に発展するようになった。

金正日将軍は、1970 年代の輝かしい成果にもとづいて主体的な文学・芸術を開花させる活動を賢明に導いた。

1981 年 3 月 31 日、全国作家・芸術家活動者大会参加者に送った書簡『主体的文学・芸術をいっそう発展させ

るために』で、文学・芸術をより高い水準に引き上げる課題を示した。

文学・芸術を発展させるうえで、すでに積み上げた業績を固守し、さらに輝かすことを第一の問題としてすべての活動を展開するようにした。

そして叢書作品の創作に深い関心を払う一方、新時代の人間の高い精神世界を哲学的に深く描いた小説と詩をはじめ、文学作品をより多く創作するようにし、1978年から開始した中・長編小説 100 編創作運動を総括し、1984 年から再び 5 年を期間とする新たな中・長編小説 100 編創作運動を展開するようにした。その結果、叢書『不滅の歴史』（抗日革命闘争期編）の創作が 15 巻にわたって完了し、数多くの小説と詩が創作された。

また、金日成主席の革命活動史を描いた多部作革命映画『朝鮮の星』をはじめ、時代の忠臣を形象化した劇映画『郡党責任書記』『月尾（ウォルミ）島』『ただひとすじに』『あの日の誓い』などの創作活動を指導し、1990 年代に入り、朝鮮労働党の幅の広い政治とその生命力を示す多部作劇映画『民族と運命』の創作をエネルギッシュに指導した。

演劇分野で 1984 年 3 月には、抗日革命闘争期に創作された『血噴万国会議』を『城隍堂』式の演劇として完成させ、つづいて『娘からの手紙』『3 人 1 党』『慶祝

大会』などを演劇舞台に再現する活動を指導し、5 大革命演劇の完成によって革命演劇の新時代を開いた。

また、民族歌劇『春香（チュンヒャン）伝』を民族歌劇芸術のモデルとして完成させ、電子音楽を現代的で人民的な朝鮮式電子音楽に発展させた。

さらに主体的舞踊表記法の研究を指導し、1987 年にそれを完成させて、舞踊芸術発展の広い道を開いた。

そして、新しい形式の音楽舞踊叙事詩の創作を発起し、『栄光の歌』(1982)『幸せの歌』(1987)と 7 万名の大公演『祭典の歌』(1989)の創作を指導して 1980 年代の記念碑的作品にし、サーカス芸術、美術分野においても飛躍的な発展をもたらした。

金正日将軍の指導によって、朝鮮の文学・芸術は 1980 年代に輝かしい開花をみせ、全社会のチュチェ思想化の促進に寄与するようになった。

金正日将軍は、文学・芸術にたいするぬきんでた造詣と知識、文学・芸術革命を指導する過程で積んだ経験にもとづき、1980 年代末と 1990 年代前半期に文芸理論書である『演劇芸術について』(1988 年 4 月)『舞踊芸術論』(1990 年 11 月)『音楽芸術論』(1991 年 7 月)『美術論』(1991 年 10 月)『主体的文学論』(1992 年 1 月)を著した。

これらの著作はすでに 1970 年代に発表した『映画芸

術論』『歌劇芸術について』とともに、主体的文学・芸術建設の前途を示す教科書となっている。

金正日将軍は、人民生活を向上させるために軽工業革命、サービス革命、住宅建設を力強くおし進めた。

人民生活をたえず向上させるのは、人民大衆中心の朝鮮式社会主義の優越性を発揚し、祖国統一を実現するために提起されるさし迫った要求であった。

1984 年 2 月 16 日の党中央委員会責任幹部協議会でおこなった演説『人民生活をさらに向上させるために』で、農業と水産業を発展させ、軽工業革命、サービス革命を起こし、住宅を大々的に建設する課題を示した。

そして、人民の食生活の問題を解決するために、農業と水産業の発展に力を入れる一方、党の軽工業革命方針を実行して一般消費物資の需要を円滑にみたすべく心血をそそいだ。

軽工業革命は、現代技術にもとづいて軽工業の生産土台を拡大、強化して短期間に一般消費物資の生産を飛躍的に成長させ、消費物資にたいする人民の増大する量的および質的需要を円滑にみたす闘争である。

金正日将軍は軽工業革命のため、これにたいする活動家の観点と立場を正し、1984 年 3 月 31 日の軽工業部門責任幹部協議会と同年 4 月 1 日のアルファー米工場へ

の現地指導の際、軽工業革命とサービス革命を起こす具体的な課題と方途を示し、12 月には党中央委員会第 6 期第 10 回総会を開いて党の方針の実行へと全党と全人民を奮起させた。

そして、紡織工業をはじめ軽工業の各部門にモデル工場をつくり、それを一般化して軽工業部門の工場を技術的に整備、補強し、現代化させた。また、1983 年 9 月には中央と各道に軽工業製品サンプル展示館を、市、郡、工場にサンプル展示室を設け、実用的なサンプルをもとに一般消費物資の品目を増やし、品質向上をはかった。

そして紡織、食料品加工、製靴、日用品など、軽工業部門のレベルアップに力をそそぐ一方、中央直轄工業所属企業所に生活必需品の分工場、職場、作業班を多く設け、都市と労働者区、協同農場で家内作業班と副業班を広く組織、運営して軽工業製品の生産を増やすようにした。

金正日将軍は 1984 年 8 月 3 日、平壌市軽工業製品展示場を現地指導する際、内部の潜在力と可能性を動員して、大衆的運動で各種の生活必需品を生産する課題を提示し、「8 ・ 3 大衆消費材」生産運動の発端を開いた。この運動は、大衆の知恵と創意にもとづいて多様な一般消費物資の生産を画期的に増大させるうえで大きな生命力を発揮した。

金正日将軍は党組織がこの運動をおし進めるように

し、1986年5月には平壌市平川（ピョンチョン）区域をモデルケースとし、その経験を全国に一般化した。さらに1989年5月には「8・3大衆消費材」生産模範郡（市、区域）称号獲得運動を展開する方針を提示した。こうしてこの運動はいっそう力強くくりひろげられ、一般消費物資の生産で重要な一翼をになうようになった。

金正日将軍は1989年6月、党中央委員会第6期第16回総会で軽工業発展3か年計画を採択し、その実現に向けて全党、全国、全人民を動員する対策を講じ、1990年6月、全国軽工業大会参加者に送った書簡『軽工業革命を徹底的に遂行するために』で、軽工業革命の課題と方途を再び提示した。

金正日将軍はサービス活動に一大転換をもたらすため、日ましに高まる人民の生活上の要求を充足させる社会主義的商業の発展に第一義的な関心を払った。商品供給体系を整然とうち立て、商業施設の現代化をはかり、農村と炭鉱、鉱山など骨のおれる部門の勤労者にたいする商品供給の改善に努めた。

また、人民の生活上の要求に応じて主要都市には近代的な規模の大きい総合レストランと専門料理店を多く設けて運営し、随所に小規模の食堂と清涼飲料店を設け、都市と労働者区に主食品加工工場を多く建設するようにした。

さらに便益サービス活動を改善するため、平壌市に近代的に建設したヘルス・センター蒼光院をモデルにして、各道、市、郡（区域）にヘルス・センター蒼光院式の総合便益サービス基地を設けるようにした。

金正日将軍は、人民の住宅問題をいっそう円滑に解決する大建設作戦を構想し推進した。

平壌市に、近代的な蒼光通りの完成につづいて紋繍（ムンス）通り、安商宅（アンサンテク）通り、光復（クァンボク）通りを建設するようにした。また清津（チョンジン）市、南浦（ナムポ）市、咸興（ハムフン）市をはじめ道都と郡機関所在地、農村の里にも近代的な住宅を大々的に建設するようにした。

そして、1984 年 6 月には新しい建材生産基地をつくる構想のもとに枇峴（ピヒョン）と安州（アンジュ）、咸興に年産 10 億枚のシリカリチート・レンガ工場を新設し、近代的な祥原（サンウォン）セメント連合企業所を建設し、各地方に自力で多くの建材生産基地をつくらせた。

金正日将軍は強固な建材基地と人民の高い熱意にもとづいて 1989 年 12 月、金日成主席の誕生 80 周年までに再び平壌市に 5 万所帯の住宅を建設することを発起し、それを推進して第 2 段階の光復通りと統一（トンイル）通りを建設し、各地方に多くの住宅が建設されるよう導いた。

金正日将軍の指導によって、軽工業革命、サービス革命、住宅建設が推進されて、人民は物質・文化生活の

領域で自主的な要求をいっそう高く実現できるようにな
った。

金正日将軍は朝鮮の社会主義を固守する経済建設を力強く推進した。

1980 年代中期にいたり、朝鮮では思想、技術、文化の 3 大革命遂行で大きな成果が達成され、社会主義制度はいっそう強化された。

金日成主席は、1986 年 12 月に開かれた党中央委員会第 6 期第 12 回総会と最高人民会議第 8 期第 1 回会議での施政演説で、第 3 次 7 か年計画(1987〜1993)の目標を提示した。

金正日将軍は第 3 次 7 か年計画の遂行へと全党と全人民を奮い立たせた。

1988 年に、全党、全人民が立ちあがって新しい展望計画遂行の突破口を開く「200 日間戦闘」を展開するよう指導した。

同年 2 月には、共和国創建 40 周年に際して全党員に党中央委員会の手紙とスローガンを送り、3 月には主要工場、企業所に「200 日間戦闘」党活動家援助グループを派遣して大衆を奮い立たせ、当該単位の活動家を積極的に援助するようにした。

「200 日間戦闘」は大衆の高い革命的熱意にもとづい

て力強く進められた。

金正日将軍は「200 日間戦闘」の主要目標を基本建設と規定し、すでに進められている発電所建設と炭鉱拡張工事、金策製鉄連合企業所の第 2 段階拡張工事と茂山(ムサン)鉱山連合企業所の能力拡張工事、順川(スンチョン)ビナロン連合企業所の建設など、主要プロジェクトに力を集中させた。

こうして「200 日間戦闘」の期間に新しい速度、「200 日間戦闘速度」が創造され、第 3 次 7 か年計画遂行の突破口が切り開かれた。

金正日将軍は、社会主義建設でひきつづき高揚を起こすために、1988 年 5 月に全国英雄大会の開催を発起し、「すべての人が英雄のように生き、たたかおう!」というスローガンを示した。

1988 年、共和国創建 40 周年に際して開かれた全国英雄大会では、金正日将軍が新たに提示したスローガンをかかげて再び新たな「200 日間戦闘」を展開し、朝鮮人民の英雄的気概を遺憾なく誇示することをアピールした。

全国英雄大会のアピールに呼応して、全人民は新たな「200 日間戦闘」でも集団的英雄主義を発揮して国の経済発展に寄与する 500 余のプロジェクトを完成し、すべての部門、すべての単位が高い戦闘目標を達成した。

金正日将軍は 2 回の「200 日間戦闘」で達成した成果にもとづき、人民経済各部門で「90 年代の速度」創造

運動を展開して第3次7か年計画の完遂をめざしてたたかうよう導いた。

金正日将軍は、金日成主席が示した『わが国における社会主義農村問題にかんするテーゼ』の完全な実現に大きな力をそそいだ。

社会主義農村テーゼを実現することは、農村問題を最終的に解決するための革命発展のさし迫った要請であった。

金正日将軍は、農民の思想・意識水準と文化・技術水準を労働者階級の水準に引き上げることに力を入れる一方、農村技術革命をおし進めて農業の工業化、現代化のレベルを高めるようにした。

そして、農業の総合的機械化の実現において基本手段であるトラクターとトラックの生産を増やし、それを農村に優先的に提供する積極的な措置を講じ、化学肥料と農薬生産を増大させて農業の化学化を推進した。

また、農業の水利化を高い水準で完成するため、1989 年の秋から翌年の春までに西部地区穀倉地帯の用水問題を完全に解決するための 800 キロの水路工事を指導し、1年足らずで完成させた。

一方、すでに組織、運営されてきた郡総合農場が全人民的所有のモデルケースとしての優越性を十分に発揮するよう指導し、1994 年には粛川（スクチョン）郡と万景台（マンギョンデ）区域の協

同農場を郡(区域)単位に統合して農業連合企業所、国営農場に発展させ、全般的協同農場を全人民的所有に移行させる条件と可能性をひきつづき熟成させていった。その結果、農村では3大革命が積極的に推進され、都市と農村間の格差が著しく縮まり、社会主義農村問題が解決されるようになった。

金正日将軍は、社会主義建設で「90 年代の速度」を創造して再び革命的大高揚を起こすよう、全党と全人民を奮い立たせた。

ソ連と東欧諸国で社会主義が挫折し、社会主義世界市場が崩壊したため、第3次7か年計画を遂行する闘争は重大な試練と難関に直面するようになった。そのうえ、帝国主義者と反動派は共和国を孤立させ圧殺しようと政治的、軍事的に、経済的に悪らつに策動した。

金日成主席は、変化した国際的環境と新たな情勢の要請に応じて第3次7か年計画に予見した経済成長テンポを調節し、いかなる状況のもとでも自力で生きていけるよう、経済的自立性を強化する方向で経済構造をいっそう完備し、対外経済関係で方向転換をする方針をうちだした。

金正日将軍はこの方針を実行するため、1990 年 1 月に開かれた党中央委員会第 6 期第 17 回総会で、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって人民経済のすべての部

門、すべての単位で最大限の増産、節約運動をくりひろげて、現存の経済的土台が効果を発揮できるようにする措置を講じた。

さらに、1990 年 2 月には全国生産革新者大会、同年 4 月には全国青年活動者大会を開き、全国の勤労者を「90 年代の速度」創造運動に奮起させた。

労働者階級とすべての勤労者は難関と試練を克服して「90 年代の速度」創造運動を力強く展開し、アメリカ帝国主義と国際反動派の反共和国策動を粉砕して第 3 次 7 か年計画を遂行した。

第 3 次 7 か年計画期間に、工業生産は 1.5 倍に増大し、工業生産の年平均成長率は 5.6%に達した。農業部門では 3 大革命が推進され、社会主義農業経営制度がさらに強固になった。

第 3 次 7 か年計画が遂行された結果、朝鮮人民は自己の社会主義を固守し、いかなる状況のもとでも自活できる強固な経済的土台をもつことになった。

金正日将軍は、党を強化し、その指導的役割を高め、領袖、党、大衆の一心団結を強化することにとくに大きな力をそそいだ。

党を強化しその指導的役割を高めることは、1980 年代の中期にいたって全社会のチュチェ思想化が新たな段

階に入った革命発展と内外情勢の重要な要請であった。

金正日将軍は、党を強化しその指導的役割を高めるために、現実発展の要請に即応して党の思想活動を改善することに第一義的な関心を向けた。

党の思想活動を改善、強化してこそ、党をさらに強化し、党員と勤労者を党のまわりにかたく結集し、革命と建設にたいする党の指導を実現することができる。

金正日将軍は 1985 年 10 月、党中央委員会書記局会議と宣伝部の責任幹部会議で、党宣伝部の役割を高め、党の思想活動を改善、強化するためには、チュチェ思想の原理教育と革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育に力を入れ、宣伝部門の活動家が大衆のなかに深く入り、社会主義経済建設のための宣伝扇動活動を展開すべきであると強調した。また、1986 年 5 月の党中央委員会書記局会議では、幹部と党員と勤労者が革命の主体について正しい認識をもち、革命的領袖観を確立するのに実質的に寄与するようにチュチェ思想教育を深化させることを強調し、1986 年 7 月の党中央委員会責任幹部との談話『チュチェ思想教育における若干の問題について』では、チュチェ思想教育を深化するうえで提起される原則的問題を明らかにした。

また、1989 年 12 月 28 日に党中央委員会責任幹部におこなった演説『朝鮮民族第一主義の精神[27]を高く発揚

しよう』と、1991 年 5 月 5 日の党中央委員会責任幹部との談話『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』などの著作で、チュチェ思想を具現している人民大衆中心の朝鮮式社会主義の優越性と不敗性の秘訣について科学的に解明し、党の思想活動が社会主義を断固擁護し、発展させるのに寄与するように方向づけた。

金正日将軍は、党を強化しその指導的役割を高めるために、各級党組織の戦闘的機能と役割を高めることに大きな力を入れた。

1989 年 6 月の党中央委員会責任幹部および道党責任書記との談話『党を強化し、その指導的役割をさらに高めよう』では、変化する情勢と関連して党組織が党の隊列をうちかためるための党内活動を強化することを強調した。

一方、1989 年 8 月には党中央委員会書記局特別指示文を下達し、その実行のための全党的な討議をおこなうようにした。

そして、この特別指示文を実行する闘争を通じて党員の組織観念を高め、かれらが党組織・思想生活に自覚的に参加し、党内民主主義と党組織規律をいっそう強化するようにした。

また、党の末端基層組織である党細胞の強化に深い関心を払い、1991 年 5 月 10 日、全国党細胞書記講習会

の参加者に送った書簡『党細胞を強化しよう』で、「すべての党細胞を忠誠の細胞にしよう!」というスローガンを提示した。そして、このスローガンのもとに各級党組織がすべての党細胞を忠誠の細胞にし、細胞の機能と役割を高めることに力点をおいて活動するようにして、党の戦闘力を強化した。

金正日将軍は、党を強化しその指導的役割を高めるうえでの党の活動方法と活動作風改善の意義を見きわめ、すべての党活動家がチョンサンリ精神、チョンサンリ方法の要求どおり活動するよう導いた。

早くから「全党が大衆のなかに入ろう!」というスローガンを提示し、活動家が大衆のなかに入ってかれらと苦楽をともにしながら活動するよう導いてきた金正日将軍は、1990 年 1 月に「人民に奉仕する!」というスローガンを示し、すべての党活動家が人民のためにすべてをつくして献身的に働くよう導いた。一方、全党的に官僚主義、形式主義、要領主義、行政代行といった古い活動方法と活動作風を根絶する思想教育と思想闘争の旋風をまきおこすようにした。

金正日将軍の指導によって、朝鮮労働党は組織的、思想的にいっそう強化され、党と大衆の統一と団結がいちだんと強化された。その結果、党員と勤労者、軍人のあいだに「党が決心すればわれわれは実行する!」とい

うスローガンのもとに、党の指導に忠実にしたがう気風が確立されるようになった。

金正日将軍は、党が強化されその役割が高まるにつれて、日ましに強まる領袖、党、大衆の一心団結をさらに強化するために努めた。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「『一心団結の威力で朝鮮式社会主義をさらに輝かそう!』、これが現段階においてわが党が提起する戦闘的スローガンです」

領袖を中心とする全社会の一心団結を実現するのは、革命の主体を強化し、いかなる波風のなかでもチュチェの革命偉業を固守し、完成するための根本的保障である。

金正日将軍は 1980 年代後半期、周辺諸国の情勢が複雑になるのに対処して一心団結のスローガンをさらに高くかかげるよう党組織を導いた。

金正日将軍は機会あるたびに、領袖、党、大衆の一心団結をさらに強化する課題と方途を示し、党と金日成主席への忠実性を信念とし良心として守り、生活の道徳として昇華していくように導いた。

こうして、全党と全社会は革命的信義と同志愛にもとづき運命をともにする一つの社会的・政治的生命体に、助け導き合いながらむつまじく暮らす一つの血縁的な大家庭となった。

多くの労働者、農民、知識人と人民軍将兵、青少年は心をこめた手紙を金正日将軍に送り、金正日将軍はかれらに直筆の返書を送った。

金正日将軍は、領袖、党、大衆の一心団結が強化され、全社会に助け導き合う共産主義的美風が開花する現実を洞察し、1993 年 12 月に全国共産主義美風先駆者大会を開き、共産主義的美徳が全社会に広まるようにした。

こうして、党と大衆の血縁的なつながりが強まり、領袖、党、大衆の一心団結はますます強固になった。

金正日将軍は、帝国主義者と日和見主義者の策動のため、1980 年代末～1990 年代初、社会主義を建設していた諸国の政権党が瓦解する重大な実態を洞察し、労働者階級の革命的党を固守し強化するための思想・理論活動を精力的に展開した。

『朝鮮労働党は朝鮮人民のすべての勝利の組織者であり、導き手である』（1990 年 10 月 3 日）と『革命的党建設の根本問題について』（1992 年 10 月 10 日）を発表して、労働者階級の革命的党建設の根本的指針を明示した。

これらの論文では、社会主義政権党建設の歴史的教訓を分析し、党の正しい指導思想を創始し発展させること、党を勤労人民大衆の大衆的政党に建設すること、党内に思想と指導の唯一性を保障し党の統一団結を強化す

ること、思想を基本にして党を強化すること、全社会の思想の一色化を実現し、全社会にたいする党の政治的指導を実現することを革命的党建設の重要な原則として提示した。

金正日将軍がチュチェの党建設理論を発展させることにより、労働者階級の党を固守し、革命と建設の組織者、導き手としてさらに発展させ、その指導的役割を高める思想的・理論的武器がもたらされた。

金正日将軍は、金日成主席の誕生 80 周年を盛大に記念するため誠心誠意をつくした。

金正日将軍は、一心団結は自分の革命哲学であり革命の大本であるとし、金日成主席の誕生 80 周年を迎える 1992 年初、一心団結の威力でチュチェの社会主義をいっそう輝かそうというスローガンを示した。

そして、金日成主席の誕生 80 周年を高い革命的熱意と勤労の成果で迎えるべく党中央委員会の手紙の精神にのっとり、生産と建設で高揚を起こして、意義深い 4 月に統一通りと平壌—開城（ケソン）間高速道路の開通式、新設、拡充された数多くの工場、企業所の竣工式をおこなうようにした。

1992 年 4 月 13 日、朝鮮労働党中央委員会と党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民

主主義人民共和国中央人民委員会は、80 年間、時代と革命、祖国と人民のまえに永世無窮の業績を積み上げた金日成主席に朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を授与する決定を採択した。

金正日将軍の大いなる思慮と計らいによって、かつてなく盛大かつ意義深く準備され、多彩にとりおこなわれた金日成主席の誕生 80 周年祝賀行事は、金日成主席のまわりに一心団結してチュチェの革命偉業、社会主義・共産主義偉業をあくまで完成せんとする朝鮮人民のかたい意志を内外に誇示し、領袖、党、大衆の一心団結はいっそう強固になった。

金正日将軍は、全軍のチュチェ思想化を力強くおし進め、国防力を全面的に強化することに大きな力をそそいだ。

国防力をいっそう強化することは、当時、アメリカ帝国主義が朝鮮半島を力の対決の試験場と公言し、共和国北半部にたいする不意の核攻撃を想定した大規模の核戦争演習であるチーム・スピリット合同軍事演習を拡大し、情勢を戦争瀬戸際に追いこんでいる状況のもとで、きわめてさし迫った要求となった。

金正日将軍は日ましに緊張の度を増す情勢に対処し、全軍のチュチェ思想化をおし進め、人民軍を党の革命武

力として強化することに第一義的な力を入れた。

1979 年 12 月に開かれた人民軍党委員会第 6 期第 20 回拡大総会を契機に、全軍に党の指導体系をいっそう強く確立する画期的な対策を講じた。

まず、人民軍党委員会第 6 期第 20 回拡大総会で人民軍内に党の指導体系を確立することを強調した金日成主席の教示の受容、討議を実質的におこなうようにした。また、1981 年 2 月と 3 月には、党の指導にかんする原理教育と党の偉大さを認識させる教育を深め、『朝鮮人民軍』紙など出版・報道手段と放送、文芸作品を通じての思想教育を積極的に展開するよう具体的に指導した。

さらに、金日成主席が 1982 年 6 月に党中央軍事委員会で示した構想にもとづき、人民軍にたいする党の指導を保障する画期的な措置を講じた。

こうして、人民軍内での党の政治活動と軍事活動にたいする金正日将軍の構想と意図が全面的に具現されるようになった。

金正日将軍は人民軍の戦闘力の強化に大きな力を傾けた。

指揮官の軍事的資質と指揮能力を高めるための各級の職級別講習、軍事講習、各種の指揮官訓練と研究討論会を計画的におこなうようにし、軍事教育事業を改善す

る対策を講じた。

そして、各種の戦闘規定と教範を主体的戦法と現代戦の要求に合わせて改善、完成し、主体的訓練方法にもとづいて戦闘訓練で主体性を確立し、「訓練も戦闘である！」というスローガンのもとに戦闘訓練を実質的におこなうよう導いた。とくに訓練で形式化と簡略化を排し、実戦訓練を多くして軍人の胆力と戦闘力を高めるよう指導した。

また、国の自然地理的条件と現代戦の特性に即応して、機動力と打撃力を高めることに基本をおいて人民軍の武力装備の現代化を高いレベルで実現する積極的な対策を講じた。

金正日将軍の指導のもとに、人民軍は党に忠実で、いかなる強敵をも撃破できる無敵の隊伍に成長した。

金正日将軍はチュチェ 80（1991）年 12 月 24 日、党中央委員会第 6 期第 19 回総会で朝鮮人民軍最高司令官に推戴され、翌年 4 月 20 日には朝鮮民主主義人民共和国元帥称号を授与された。また 1990 年 5 月の最高人民会議第 9 期第 1 回会議で朝鮮民主主義人民共和国国防委員会第 1 副委員長に、チュチェ 82（1993）年 4 月 9 日には最高人民会議第 9 期第 5 回会議で国防委員会委員長に推戴された。

1990 年代に入り、内外情勢は国防力をますます強化

することを求めた。

アメリカ帝国主義は社会主義の旗をかかげて進む朝鮮を軍事的に圧殺する野望で、世界の他の地域の侵略兵力を朝鮮と極東地域に再配備し、共和国を核攻撃対象と定め、核試験戦争であり予備戦争であるチーム・スピリット合同軍事演習を再開した。こうして、朝鮮にはいつ戦争が勃発するかわからない一触即発の情勢がかもしだされた。

金正日将軍は、1991 年 12 月の朝鮮人民軍中隊政治指導員大会と 1993 年 10 月の朝鮮人民軍指揮官・政治活動家大会をはじめ、1992 年から 1993 年にかけて 10 余回にわたって朝鮮人民軍部門別大会を開き、人民軍内の幹部を党と領袖に忠実で、革命的展開力と決断力のある有能な軍事指揮官、政治活動家に準備させた。

そして、人民軍内に将兵一致、党社一致、軍民一致の美風を発揮させ、訓練を強化し軍事規律を確立して人民軍の戦闘力と戦闘準備を強化していった。また、1992 年初から各種の戦闘訓練をより高い水準でおこなうようにし、それを現地で指導した。

1994 年 4 月 25 日には朝鮮人民軍第 564 軍部隊を、1995 年元日には朝鮮人民軍第 214 軍部隊を、同年 2 月には朝鮮人民軍第 291 軍部隊の女性対艦砲中隊と朝鮮人民軍海軍 155 軍部隊を現地指導し、戦闘訓練と軍人の生

活を見守り、人民軍の戦闘力を強化するための綱領的課題を提示した。

さらに、1995 年 4 月と 6 月、朝鮮人民軍創建 63 周年と海軍節に際して、朝鮮人民軍第 1017 軍部隊と第 853 軍部隊を現地で指導し、人民軍を必勝不敗の革命武力に強化するための綱領的課題を提示した。

金正日将軍の精力的な指導によって、人民軍は政治的に、軍事的にかつてなく強化された。

金正日将軍は朝鮮人民軍創建 60 周年と祖国解放戦争勝利 40 周年を迎え、閲兵式をはじめ各種の祝賀行事を盛大におこない、祖国解放戦争勝利記念塔を大記念碑として建立して、革命武力の威力を誇示し、国防力を強化する画期的な契機となるよう導いた。

金正日将軍は全社会に革命的軍風をうち立て、軍民一致の伝統的美風を高く発揮させた。

こうして新しい世代と人民のあいだに軍事を重視する気風が確立され、1993 年 3 月、準戦時状態が宣布されたとき、わずか 10 余日間に 50 余万の青年学生と除隊軍人が人民軍の入隊、復隊を志願した。

金正日将軍は党の革命的経済戦略を貫徹するたたかいを指導した。

金日成主席は、第 3 次 7 か年計画の遂行で達成した

成果にもとづき、帝国主義者の共和国圧殺策動を粉砕し、社会主義偉業の勝利を確固と保障するため、1993 年 12 月に開かれた党中央委員会第 6 期第 21 回総会で党の革命的経済戦略を示した。

金正日将軍は、金日成主席によって提示された革命的経済戦略の貫徹へと全党と全人民を奮い立たせた。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「わが党が示した革命的経済戦略は、調整期に農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義の方針を貫徹し、人民経済の先行部門である石炭工業、電力工業、鉄道輸送を確固と優先させ、金属工業をひきつづき発展させることです」

党の革命的経済戦略は、国の経済構造を重工業が基本の経済から農業と軽工業が基本の経済に切り換え、対外貿易で方向転換をすることである。

金正日将軍は党の革命的経済戦略を貫徹するため、革命隊伍の一心団結を強化し、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を高く発揮させた。また経済成長テンポを調整し、基本建設を大幅に減らし、政務院の役割を高めさせた。また、すべての幹部が強い革命精神をもって確信と楽観にみちて戦闘的に働き、すべての党組織が組織・政治活動を積極的に展開するようにした。

1994 年 4 月には、最高人民会議第 9 期第 7 回会議で

採択された社会主義経済建設の調整期の課題を遂行するための具体的な措置を講じた。また、1994 年 2 月には全国農業大会、4 月には全国畜産部門活動者会議と全国石炭工業部門活動家大会を開き、革命的経済戦略の貫徹へと党員と勤労者を奮い立たせた。

金正日将軍は「鄭春実（チョンチュンシル）運動[28]」を発起し、すべての部門、すべての単位でこの運動を力強く展開するよう革命的な措置を講じた。

1994 年 10 月 20 日の党中央委員会責任幹部との談話『郡の役割を高めて人民生活に転換をもたらそう』で、前川（チョンチョン）郡商業管理所と孟山（メンサン）郡の経験を見習い、すべての郡が農業をりっぱに営み、地方経営工業を発展させ、郡機関所在地と農村をりっぱに整備するようにし、1994 年 12 月には鄭春実運動先駆者大会を開催するようにした。

金正日将軍の指導によって党の革命的経済戦略が貫徹され、人民生活の向上で大きな成果が達成された。

金正日将軍は、高麗（コリョ）民主連邦共和国創立方案と全民族大団結 10 大綱領の実現をめざすたたかいを賢明に導いた。

1980 年代に入って、祖国統一をめざすたたかいの前面に提起されたもっとも重要な課題は、金日成主席が第 6 回党大会で提示した高麗民主連邦共和国創立方案を実

現することであった。

金正日将軍は高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために、この統一方案の正当性と合理性、現実性を内外に広く宣伝するようにした。また、朝鮮半島の平和を保障するたたかいを力強く展開するよう導いた。

金正日将軍は、金日成主席が朝鮮半島の緊張を緩和し、強固な平和を保障するためにうちだした、朝鮮停戦協定の平和協定への転換と北南間の不可侵宣言の採択を目的とする北、南、アメリカの3者会談と北南高位級政治・軍事会談開催などの提案を実現する主動的な措置を講じるよう具体的に指導した。

こうして1984年と1985年に、最高主権機関会議ではアメリカと南朝鮮当局に3者会談提案、北南国会会談提案の手紙を送り、1986 年には朝鮮半島で戦争を防ぎ、鋭い軍事的対峙状態を緩和するための一連の措置を講じた。1987 年にも 10 万の朝鮮人民軍兵力を一方的に縮小する措置を講じ、ついで1988年11月には包括的な平和方案を示してその実現を促し、1990 年 5 月には再び朝鮮半島の平和のための軍縮提案を示した。真の平和統一の立場を反映したこれらの提案と措置は、内外の絶大な支持と歓迎を受けた。

金正日将軍は連邦国家創立の前提をつくるために、北南間の民族的和解と団結をなしとげるたたかいを推進

した。

1984 年 9 月初旬に、共和国赤十字会の名義で南朝鮮の 20 余万の水害被災民に救援物資[29]を送る決定を発表するようにして、民族の和解と団結の新たな局面を開いた。こうして、12 年間中断されていた北南赤十字会談は1985 年 5 月から再開されるようになった。

金正日将軍は再開された対話と協商の幅を広げるため、各種の対話提案を示すようにし、その実現のために努力した。

そして、小規模でも北南間の往来を実現して和解と団結の雰囲気をつくるため北南芸術団とスポーツ団、故郷訪問団の相互訪問を実現させ、それが結実をもたらすよう導いた。こうして 1985 年 5 月、北南赤十字会談では祖国解放 40 周年を契機に、赤十字芸術団および故郷訪問団を交換する問題で合意が成立した。

さらに、第 11 回アジア競技大会（1990 年 9 月）での北と南の共同応援問題と北南統一サッカー競技大会（1990 年 10 月）、汎民族統一音楽会（1990 年 10 月）、「90 年を送る統一伝統音楽会」（1990 年 12 月）、北南単一チームによる第 41 回世界卓球選手権大会と第 6 回世界青年サッカー選手権大会の参加の実現に導いた。こうして、反統一勢力の卑劣な妨害にもかかわらず、北南の全人民のあいだで民族的和解と団結の雰囲気がいつに

もまして高まり、全同胞が祖国統一の熱気でわき立つようになった。

金正日将軍は民族大統一戦線の結成に大きな力をそそいだ。

朝鮮労働党と共和国政府と祖国統一民主主義戦線中央委員会が、北と南、海外同胞の全民族的な統一戦線の結成を促進するための合理的な発起をし、その実現に向けて努力するよう指導した。

その結果、南朝鮮と海外の愛国的民主勢力を祖国統一偉業に決起させ、組織的に結集するうえで大きな前進がもたらされた。ウィーンとヘルシンキ、東京で開かれた北と海外同胞の大会と対話をはじめ、高麗民主連邦共和国創立方案を実現するための統一愛国運動は世界各国の海外同胞のあいだで急速に拡大し、1984 年 12 月に「祖国統一のための民族連合」が結成されるなど、民族大統一戦線の結成を促す強固な基礎が築かれた。

金正日将軍は北南連席会議を開催するためのたたかい、汎民族大会を開催するためのたたかいを強力に展開するよう指導した。こうして 1990 年 8 月、北と南、海外の広範な各界人士の参加のもとに、民族的大会合である汎民族大会が盛大に開催され、大会では、内外の分裂主義者の策動を粉砕して統一偉業を必ず成就するという民族の意志を確認し、世界に誇示した。また同年 11 月

には、全民族的な統一愛国勢力の連合組織である祖国統一汎民族連合（汎民連）が結成された。汎民連の結成は、祖国統一の主体的力量を強化し、統一運動を全民族的範囲で統一的に発展させるうえで画期的契機となった。

金正日将軍は、全民族的な統一熱意が高まる環境のもとで、祖国統一の決定的局面を開くための北南高位級会談を実現させるよう導いた。その結果、1990 年 9 月から北南高位級会談がはじまり、1991 年 12 月の第 5 回会談では「北南間の和解と不可侵および協力、交流にかんする合意書」が採択され、1992 年 1 月には朝鮮半島の非核化にかんする共同宣言が発表されるにいたった。北南合意書は 1972 年 7 ・ 4 共同声明で宣言された祖国統一の 3 大原則を再確認し、それにもとづいて政治的・軍事的対決状態を解消して民族的和解をなしとげ、武力による侵略と衝突を防ぎ、緊張を緩和し平和を保障し、多方面にわたる協力、交流を実現して民族共通の利益をはかり、平和統一を成就するために共同の努力を傾注すべく北南双方の意志を明らかにした。

北南合意書と非核化共同宣言の採択は、祖国統一の 3 大原則の貫徹をめざす全民族的な闘争の過程で達成された大きな勝利であり、祖国統一を実現する道で新たな里程標をしるした歴史的な出来事であった。

金正日将軍は『祖国統一のための全民族大団結 10 大

綱領』を実現するたたかいを精力的に指導した。

アメリカ帝国主義とその追随勢力は、北南合意書と非核化共同宣言の履行を妨げ、情勢を極度に緊張させた。南朝鮮当局者はアメリカ帝国主義と結託してチーム・スピリット合同軍事演習を再開し、すべての北南対話を凍結状態におとしいれた。

一方、アメリカ帝国主義はありもしない朝鮮の「核問題」を国連に上程し、「制裁」を加えようと策動した。

金日成主席は、国と民族が直面したきびしい難局を打開し、全民族の団結した力で国の平和と平和統一の前途を開くため、1993 年 4 月に『祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領』を発表した。この綱領は、思想と体制、信教と財産の違いを超越して全民族を一つに結集する民族団結の大憲章であり、民族主体の力で祖国統一を実現するための統一綱領である。

金正日将軍は『祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領』を実現するたたかいに大きな力を入れ、内外の人民の絶大な支持と歓迎を呼び起こすようにした。

金正日将軍は李仁模（リインモ）をはじめ非転向長期囚の送還問題を祖国統一をめざすたたかいの一環とし、その実現のための闘争を指導した。

各政党、大衆団体が南朝鮮赤十字社に非転向長期囚の送還を要求する手紙を送り、各国の赤十字団体と国際

機構に訴えてかれらの送還を要求する連帯運動を展開し、北南間のすべての対話でもかれらの送還を強く要求するよう導いた。

こうして、さる祖国解放戦争の時期、敵に捕らえられて 34 年間も南朝鮮の獄中で信念と意志を守り通した朝鮮人民軍従軍記者、李仁模の送還がついに 1993 年 3 月 19 日に実現した。

金正日将軍は、民族主体の力で国の統一を実現する転換的局面を切り開くため、金日成主席が 1993 年 5 月にうちだした北南最高位級特使の交換を実現させるよう積極的に努力した。その結果、1994 年 6 月 28 日、板門店（パンムンジョム）では歴史的な北南最高位級会談のための予備接触がおこなわれ、北南最高位級会談を 1994 年 7 月 25 日から 7 月 27 日にかけて平壌でおこなうという合意書が採択された。北南最高位級会談は南朝鮮当局者の非人間的で反民族的な行動のため実現されなかったが、北と南、海外の広範な人民のあいだに祖国統一の気運を高めた。

金正日将軍の賢明な指導によって、朝鮮労働党の祖国統一方針が内外に広く伝えられ、祖国統一の主体的革命力量が強化されて、祖国統一の前途には明るい展望が開かれた。

金正日将軍は世界の自主化を実現する活動に深い関

心を払った。

1980 年代に入って国際情勢は、支配権の維持、拡張をもくろむ帝国主義者の干渉と侵略策動のため複雑さと緊張をきわめた。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「反帝自主勢力の団結を実現することは、帝国主義の侵略と戦争策動を破綻させ、世界の恒久平和を実現し、自主化した新しい世界を建設するうえで決定的保障となる」

金正日将軍は社会主義諸国と各国の共産党、労働者党との友好関係を発展させた。

とくに朝中両国の党と人民の友好、団結の強化に大きな意義を付与し、1983 年 6 月、中国を訪問して朝中友好の新しいページを開いた。

そして 1984 年 7 月、清津（チョンジン）で開かれた党中央委員会第 6 期第 9 回総会で、世界の進歩的政党、大衆団体、革命組織との連係と接触を強める課題を示し、党代表団の相互訪問を活発にするための具体的な対策を講じた。

その結果、1985 年の 1 年間だけでも、70 余回にわたって朝鮮労働党代表団が各国を訪問して各政党と会談し、90 余の外国の党代表団が平壌を訪問した。1990 年 10 月におこなわれた朝鮮労働党創立 45 周年祝賀行事には、世界 5 大陸から 126 か国の 276 の代表団と代表が参加した。

共産党、労働者党、進歩的政党間の接触と往来が強

化されて、諸党間の親善・協力関係と国際共産主義運動の団結がいっそう強まり、反帝自主勢力の強化に大きく寄与した。

金正日将軍は非同盟運動の発展にも深い関心を払った。

1983 年 5 月 3 日に発表した論文『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高くかかげて進もう』をはじめ諸著作では、非同盟運動の根本原則を明らかにし、非同盟諸国がかたく団結し、経済、技術上の協力を緊密にすることを強調した。また 1986 年 6 月には、朝鮮労働党中央委員会政治局、中央人民委員会合同会議の報道を通じて、複雑な国際情勢のなかで非同盟運動が帝国主義者の戦争政策に反対し、世界平和を守り、旧国際経済秩序をうちこわして公正な新国際経済秩序をうちたてるたたかいを力強く展開することを強調した。

金正日将軍は世界の平和愛好人民の反帝共同闘争の拡大発展にも大きな力をそそいだ。

1983 年 7 月に平壌で開かれた反帝・親善・平和のための世界ジャーナリスト大会と、1986 年 9 月に開かれた朝鮮半島における非核・平和のための平壌国際会議が、新たな世界戦争の危険を防いで平和と安全を守り、世界の平和愛好人民を反帝共同闘争に立ち上がらせる重要な契機となるよう指導した。

とくに 1989 年 7 月、平壌で開催された第 13 回世界

青年学生祭典が反帝連帯、平和と親善の大祭典となるよう賢明に指導した。

1988 年 10 月 12 日には『現代と青年の任務』を発表し、現代の青年の生の価値と意義を明らかにし、平壌祭典がその崇高な理念を輝かすことのできる思想的・理論的指針をもたらした。さらに、祭典の準備を国家的な活動としておし進め、祭典の開幕、閉幕行事に自ら参加して世界 5 大陸の青年学生を鼓舞した。

金正日将軍は、1982 年から伝統的に毎年 4 月 15 日の祝日を契機におこなわれる「4 月の春親善芸術祭」を盛大な国際芸術祭典になるよう指導して、反帝自主勢力の国際的連帯をたえず強化していった。

1980 年代の後半期に、帝国主義者は社会主義諸国と新興諸国を内部から瓦解させる策動をかつてなく悪らつに強行する一方、資本主義にたいする幻想を執拗に流布したため、それに幻惑された国では反帝闘争を放棄し、資本主義を引き入れる重大な事態が起こった。

金正日将軍は 1987 年 9 月 25 日、党中央委員会の責任幹部との談話『反帝闘争の旗をさらに高くかかげて社会主義・共産主義の道を力強く前進しよう』で、帝国主義の滅亡の不可避性と社会主義の勝利の必然性を明らかにし、反帝自主偉業の推進で提起される根本問題に深奥な解答を与えた。

この談話では、第 2 次世界大戦後、帝国主義のかしらとなったアメリカ帝国主義が資本の対外進出と国際化をおし進めて資本主義列強間の政治的・経済的・軍事的結託関係がつくられ、かれらの統治手法と略奪手法が狡猾になったのが現代帝国主義の重要な特徴であり、物質生活における奇形化、精神・文化生活における貧困化、政治生活における反動化が現代帝国主義の反人民性と腐朽性を示す資本主義社会の基本的特徴であることを新たに解明した。

そして現代帝国主義の全貌を明らかにしたうえで、帝国主義の滅亡の不可避性と社会主義の勝利の必然性、帝国主義に反対し全世界の自主化偉業を実現するための具体的方途を明示した。

こうして、現代が切実に求める現代帝国主義にかんする理論、社会主義にかんする理論、全世界の自主化にかんする理論を独創的に深化、発展させて、革命闘争の強力な思想的・理論的武器をもたらし、チュチェの革命理論を豊かにした。

金正日将軍は平壌宣言の旗のもとに、国際社会主義運動を再建するたたかいに深い関心を払った。

1980 年代末から 1990 年初にかけて、社会主義を建設していた一部の国で資本主義が復活する重大な事態が生じた。新たな情勢に対処して、金正日将軍は精力的な思

想・理論活動によって社会主義偉業を固守し、それを再建する道を明示した。

金正日将軍は、党中央委員会の責任幹部との談話『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』（1991 年 5 月 5 日）と『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』（1992 年 1 月 3 日）、党中央委員会機関誌『勤労者』に寄せた談話『社会主義にたいする誹謗は許されない』（1993 年 3 月 1 日）、『労働新聞』に発表した論文『社会主義は科学である』（1994 年 11 月 1 日）、『思想活動を優先させるのは社会主義偉業遂行の必須の要求である』（1995 年 6 月 19 日）などの著作を発表した。

これらの著作では、社会主義社会の性格とその発展の合法則性、社会主義・共産主義建設で堅持すべき戦略戦術上の原則、党と国家の建設、革命と建設にたいする党の指導、社会主義偉業遂行での思想活動の必然性と党の思想活動の原則と方途など、数多くの理論問題を新たに解明し、チュチェの社会主義建設理論をさらに発展させた。

また、党建設、党活動にかんする多くの著作を発表し、チュチェ思想にもとづく革命的党建設理論と党活動原則を集大成し、社会主義偉業の完成で提起されるすべての理論的・実践的問題に解答を与えた。

金正日将軍は、全国人民政権機関活動家講習会の参

加者に送った書簡『人民政権の優越性をいっそう高く発揮させよう』（1992 年 12 月 21 日）で独創的な人民政権建設理論を展開し、『青年をチュチェの革命偉業の頼もしい継承者にしっかり準備させよう』（1990 年 1 月 17 日）と青年デーに際して全国の青年と社労青活動家に送った書簡『青年は党と領袖に限りなく忠実な前衛になろう』（1991 年 8 月 26 日）では、社会主義偉業の遂行において青年を革命の継承者に育てることの意義と課題を提示した。1996 年 1 月に開かれた朝鮮社会主義労働青年同盟代表者会議では、同盟の名称を、朝鮮青年運動の開拓者であり、指導者である金日成主席の名を冠して金日成社会主義青年同盟に改称することを決定した。

金正日将軍は、金日成社会主義青年同盟中央委員会機関紙『青年前衛』に寄せた談話『金日成同志の青年運動にかんする思想と指導業績を輝かしていこう』（1996 年 8 月 24 日）で、金日成主席の主体的な青年運動思想と理論、青年運動発展のために築きあげた指導業績を固守することについて明示した。

金正日将軍によって、社会主義偉業の固守、完成で提起される理論的・実践的問題に明哲な解答が与えられた結果、世界の進歩的人民は勝利の信念をもち、社会主義を新たな土台の上で再建し、社会主義偉業を前進させることが可能となった。

金正日将軍は、社会主義偉業を擁護し、前進させるための革命的党の共通の闘争綱領をもたらすために努力した。

その結果として、1992 年 4 月、平壌では社会主義を志向する世界の 70 の進歩的政党の党首、代表との真しな協議と連係のもとに、平壌宣言「社会主義偉業を擁護し、前進させよう」が作成、発表された。

平壌宣言はその真理性と正当性によって、日ましに世界の多くの政党と人民の支持と共感を呼んでおり、それは社会主義再建運動の旗じるしとなっている。宣言に署名した党は 1995 年 5 月現在、世界的に 220 余に達している。

金正日将軍は、社会主義のとりでである朝鮮の圧殺を企むアメリカをはじめ帝国主義連合勢力の執拗な核騒動を粉砕するたたかいを指導した。

アメリカ帝国主義はありもしない「核問題」を口実に朝鮮半島の情勢を極度に緊張させ、1993 年にはチーム・スピリット合同軍事演習を再開して、共和国を軍事的に威嚇した。

金正日将軍は、アメリカ帝国主義の侵略策動に対処して 1993 年 3 月 8 日、全国、全人民、全軍に準戦時状態を宣布し、3 月 12 日には共和国政府声明で共和国の核拡散防止条約からの脱退を宣言する断固たる措置を講

じた。こうした自衛的措置は世界的に嵐のような反響を呼び、アメリカ帝国主義をして朝鮮との会談に応じざるをえなくした。

金正日将軍は、朝米会談を通じての核対決戦においても自主的立場と尊厳を堅持する一方、柔軟かつ大胆な外交戦を展開するよう導いた。

こうして、1993 年 6 月から 1994 年 10 月にかけての 3 ラウンドの朝米会談の末に、朝米基本合意文が発表され、金正日将軍へのアメリカ大統領の保証書簡が公表された。

アメリカは朝米基本合意文に署名することにより、共和国にたいして核兵器を含む武力を使用したり、武力で威嚇することをせず、朝鮮半島の非核化、平和と安全を保障し、共和国の自主権を尊重し、朝鮮の平和的統一を支持する義務を負うことになった。

またアメリカは、共和国が核拡散防止条約の義務を履行し、黒鉛減速炉による原子力発電所の建設を凍結するかわり、軽水炉による原子力発電所の建設を保障する義務をはじめ、さまざまな政治的・経済的・外交的義務を負うことになった。

金正日将軍が社会主義のとりでを固守した輝かしい業績と模範は、世界の自主化と社会主義運動の再建に大きな鼓舞的影響を及ぼした。

チュチェ 83（1994）年 7 月 8 日、全朝鮮人民の慈父である金日成主席が急逝した。

朝鮮の社会主義偉業が折り重なる難関と試練を乗り越えて力強く前進し、祖国統一の前途に新たな局面が開かれつつあった歴史的な時期に金日成主席が逝去したことは、党と革命、人類の自主偉業にとって最大の損失であり、もっとも大きな悲しみであった。

金正日将軍は悲しみのうちに国家葬儀委員会を構成し、7 月 9 日正午の重大放送で金日成主席の逝去にかんする訃告を発表するようにした。

チュチェ 83（1994）年 7 月 8 日から 17 日までとされた哀悼期間は、全人民の切々たる心情と要望を反映して 3 日間延期され、さらに 100 日間になった。

1994 年 7 月 19 日、平壌では金正日将軍の参加のもとに金日成主席と永別する儀式がおごそかに挙行された。翌日、金日成広場では中央追悼大会が開かれ、同時に全国各地で追悼式がおこなわれた。

金正日将軍は、金日成主席を失った悲しみを力と勇気にかえ、主席の遺訓を守ってそれを忠実に実行するたたかいへと全人民を導いた。

金正日将軍は、金日成主席を朝鮮革命の永遠なる領袖、民族の太陽として仰ぎつづけるよう「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにある」「偉大な領袖金日成

同志の革命思想でいっそうしっかり武装しよう！」というスローガンを新たに提示した。

　また『偉大な領袖金日成同志はとわに生きる』『偉大な生涯の 1994 年』などの記録映画、太陽のように明るい笑顔の金日成主席の肖像画をはじめ美術作品を新たに編集、創作させ、党機関紙などの出版・報道手段とテレビジョンの画面に金日成主席の生涯と革命活動を収録した写真と映画を集中的に掲載、放映させた。

　金正日将軍は 1995 年 4 月 30 日、朝鮮労働党創立 50 周年に際する党中央委員会のスローガンを提示し、党員と勤労者を革命と建設に奮起させた。

　そして 1995 年 6 月 12 日には、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院の決定書「偉大な領袖金日成同志を永生の姿で長く安置するために」を採択するようにした。

　決定書には、金日成主席の逝去 1 周忌を迎え、金日成主席を永生の姿で末長く高く仰ぎ、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業を継承し、完成すべく全党、全軍、全人民の一致した志向と念願を反映して、金日成主席が長いあいだ執務して党と国家活動を指導した錦繍山（クムスサン）議事堂を「錦繍山記念宮殿」にして錦繍山地区をチュチェの最高聖

地にし、錦繍山記念宮殿内に金日成主席を生前の姿のまま安置することが明記されている。

錦繍山記念宮殿は金正日将軍の構想と精力的な指導によって、チュチェの最高聖地としてととのえられ、1995 年 7 月 8 日に公開された。

金正日将軍は、錦繍山記念宮殿の公開後、再び錦繍山地区の全域を整備する万年大計の構想を立て、広大な宮殿広場をみかげ石で舗装し、宮殿正面の金日成主席の肖像を永遠に色あせぬようにモザイクで形象化し、広い敷地に樹木園を造成するようにした。また宮殿を訪ねる人びとの便宜をはかって、宮殿の正面道路と外廊を建設するようにした。

金正日将軍は金日成主席の逝去 3 周忌を迎え、錦繍山記念宮殿地区に永生塔「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにある」を新たに建立し、1997 年 7 月 8 日には金日成主席の革命的生涯と不滅の業績を長く輝かし、主席の革命偉業を継承し、完成するため、金日成主席が誕生した 1912 年を元年とするチュチェ年号を制定し、主席の誕生日である 4 月 15 日を太陽節として記念するようにした。

金正日将軍によって新たに提示された党の基本スローガンと種々の措置には、金日成主席を朝鮮革命の永遠なる領袖としてとこしえに仰ぎ、チュチェの革命偉業を

完成せんとする朝鮮労働党と人民のかたい信念と意志が反映されている。

金正日将軍は、金日成主席がうちだした党の革命的経済戦略の実行をはじめ、党活動と軍事活動、祖国統一大業と対外活動など、すべての部門の活動が金日成主席の遺志どおり寸分の狂いもなく進められるよう指導した。

金正日将軍は 1994 年 10 月 16 日、党中央委員会政治局会議で、金日成主席の遺志どおり革命と建設をおし進める決意をつぎのように披瀝した。

「わたしはこれから、金日成同志が革命と建設を指導する歴史的過程で残した教えを幾百、幾千年が過ぎても変わることなく唯一の指導指針とし、あくまで実行していくつもりです」

金正日将軍は、金日成主席の思想と業績を擁護し、継承、発展させる活動を精力的に指導した。

1995 年 10 月、朝鮮労働党創立 50 周年に際し、著作『朝鮮労働党は偉大な領袖金日成同志の党である』、1995 年 12 月には『革命先輩を敬うのは革命家の気高い道徳的信義である』を発表して、金日成主席の思想と業績を忠実に継承し発展させ、その偉業を代を継いで完成する意志を改めて宣言し、革命実践を通じて革命の先輩を尊敬し、革命先輩の最高代表者である金日成主席を永遠に高く奉じることを指摘した。

金正日将軍は、金日成主席の著作出版宣伝を党の思想活動の第一義的な課題とし、チュチェ思想の叢書である『金日成著作集』を 50 巻まで発行するようはからった。

1990 年代の後半期にいたり、革命的経済戦略を実現するための朝鮮人民のたたかいは、チュチェの社会主義の圧殺を企む帝国主義連合勢力と反動派の策動がさらに悪らつになり、数年つづきの天災のため大きな試練に直面するようになった。

金正日将軍は党の革命的経済戦略を実行して社会主義建設で新たな高揚を起こすため、全人民が「苦難の行軍」精神で生き、働くようにした。

「苦難の行軍」精神は、金日成主席の指導のもとに抗日革命闘争のもっともきびしい時期に、朝鮮革命の命脈を守り、大高揚を起こした透徹した革命精神、百折不撓の革命精神である。

金正日将軍は、1996 年と 1997 年の新年に際し、『労働新聞』と『朝鮮人民軍』紙、『青年前衛』紙に共同社説「赤旗を高くかかげ、新年の進軍を力強くおし進めよう」と「偉大な党の指導にしたがい、わが国、わが祖国をさらに富強に建設していこう」を発表するようにした。これは全党、全国、全軍が「苦難の行軍」精神、革命的軍人精神、赤旗精神で社会主義総進軍をおし進めるうえで大きな意義をもった。

金正日将軍は、1996 年 12 月に全国農村青年分組・青年作業班活動者会議を、1997 年 3 月には全国畜産部門活動者会議を開いて、党の農業第一主義方針と畜産政策の実行に党員と勤労者を奮起させ、1996 年 6 月には全国青年同盟初級団体書記大会を、同年 10 月と 12 月には全国職業同盟模範初級団体委員長大会と全国農業勤労者同盟模範初級団体委員長大会を開き、党の経済戦略実行における勤労者団体の役割を向上させた。

また、全党活動家会議に送った書簡『今年を社会主義経済建設で革命的転換の年にしよう』（1997 年 1 月 24 日）で、1997 年度の社会主義経済建設の課題を遂行するためには、党組織の活動に新たな転換をもたらすべきであると指摘した。

そして、金日成主席の遺志をつぎ、安辺（アンビョン）青年発電所と党創立記念塔、清流（チョンリュ）橋（2 段階）と錦綾（クムルン）第 2 トンネル、平壌――香山（ヒャンサン）観光道路、月飛山（ウォルビサン）発電所、元山（ウォンサン）――金剛（クムガン）山間鉄道などを大記念碑的建造物として建設し、九月（クウォル）山、正方（チョンバン）山、七宝（チルボ）山などの名勝を人民の遊園地として整備するよう指導した。

金正日将軍は教育・文化活動にも深い関心を払い、これを導いた。

1997 年 2 月、全国高等中学校「7 ・ 15 最優等賞」受賞者大会に送った祝賀文で、すべての青少年を党と領袖

に忠実で知・徳・体を兼備した革命の頼もしい継承者に育てるよう強調した。

また、1996 年 10 月 1 日、金日成総合大学創立 50 周年に際し、大学の教職員、学生に送った書簡『革命発展の要請に即応して大学教育を強化するために』で、社会主義偉業に忠実な革命的人材を多く育てるのは朝鮮革命のさし迫った要求であることを強調し、大学教育の改善で提起される課題を提示した。

金正日将軍は直面したきびしい情勢に対処して、軍事を国事中の国事とし、人民軍を革命の主力軍、自衛的国防力の中核とし、最前線の区分隊など、人民軍部隊を現地指導して、党の革命武力強化の最全盛期を開いた。

1995 年につづいて 1996 年と 1997 年にも、前線東部の 351 高地を守る部隊と朝鮮人民軍板門店代表部、前線西部と中部に位置する部隊、海軍と空軍部隊、諸島防御隊、軍事教育機関など、多くの人民軍部隊を指導し、人民軍の強化と戦闘準備の完成で提起される課題を示し、軍人の生活に配慮した。これに励まされた朝鮮人民軍将兵は、「偉大な金正日同志を首班とする革命の首脳部を命を賭して守ろう！」というスローガンをかかげ、青春も生命もささげてたたかう金正日最高司令官の第一近衛兵、第一決死隊に鍛えられ、全軍に領袖決死擁護精神、銃弾・爆弾精神、自爆精神がみなぎるようになった。

金正日将軍は、金日成主席の畢生（ひっせい）の偉業であり切なる念願であった祖国統一を自身の最大の課題とし、その遂行に心血を注いだ。

1997 年 8 月 4 日に著作『偉大な領袖金日成同志の祖国統一遺訓をあくまで貫こう』を発表した。

この著作で、金日成主席が卓越した思想と指導で祖国統一偉業を切り開き、祖国統一の強固な基礎を築き、祖国統一の明るい展望を開いた業績を指摘し、祖国統一の 3 大憲章である自主、平和統一、民族大団結の 3 大原則と全民族大団結の 10 大綱領、高麗民主連邦共和国創立方案にもとづいて祖国を統一することを明示した。とくに、北南間の関係改善は祖国の自主的平和統一を実現するための切迫した要求であるとし、南朝鮮当局者が外部勢力依存から脱して民族自主の立場に立ちもどることを呼びかけた。

そして、今後南朝鮮当局者が全民族の期待にこたえて現在の反民族的で反統一的な対決政策から脱皮し、実際の行動によって肯定的な変化を見せるなら、かれらといつでも会って民族の運命について虚心坦懐に協商し、祖国統一のためにともに努力するであろうと述べた。また朝鮮問題を正しく解決するためには、関係諸国も朝鮮の統一を支援する立場で肯定的な役割を果たすべきであると指摘した。

金正日将軍は 1997 年 6 月 19 日、著作『革命と建設において主体性と民族性を固守するために』を発表した。

この著作で、主体性と民族性を守るかいなかは革命と建設の成敗を左右する問題であり、国と民族の興亡を決する死活の問題であると指摘し、朝鮮労働党と人民は金日成主席の指導のもとに革命闘争の全期間、帝国主義と支配主義に反対し、主体性と民族性を断固と守ることにより、国と民族の自主的発展をゆるぎなく保障し、革命と建設で輝かしい勝利を達成したと述べた。

また、革命と建設で主体性と民族性を固守するのは、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業の遂行において堅持すべき根本原則であり、主体性と民族性を固守し具現して社会主義建設を促進し、祖国の統一と富強発展をとげるのは、党と人民の信念であり意志であると指摘し、南朝鮮反動支配層の「世界化」「国際化」策動の反民族性をきびしく批判した。

金正日将軍は、朝米基本合意文の履行途上の難関を打開し、1995 年 12 月、朝鮮民主主義人民共和国政府と朝鮮半島エネルギー開発機構（KEDO）間に軽水炉提供にかんする協定が締結されるよう導き、キューバで開催された第 14 回世界青年学生祭典に 500 名で構成された代表団を派遣し、国際的連帯を強化するようはからった。

実に、金日成主席逝去後の 3 年間は「今日のための

今日に生きるのでなく、明日のための今日に生きよ」という金正日将軍の言葉どおり、すべての活動家と勤労者がわが国、わが祖国を富強にするため、社会主義建設で新たな高揚を起こした日々であり、帝国主義者と世界反動派の悪らつな孤立、圧殺策動のもとでも、金日成主席の生涯がひめられている赤旗をひるがえして勝利と偉勲をとどろかせた日々であった。

金正日将軍の指導により、朝鮮人民は偉大な領袖金日成主席の偉業を継承し、完成できる政治的・思想的基礎を強化し、革命と社会主義祖国を頼もしく守り、国の経済的威力を発揮し、祖国統一を早め、チュチェの革命偉業を前進させるのに寄与できる保障をもたらした。

金正日将軍は朝鮮革命と建設に積みあげた不滅の業績により、革命の指導者としての絶対的な権威をにない、朝鮮人民に限りなく信頼され尊敬されてきた。

1997 年 9 月末から 10 月初にかけて、朝鮮労働党朝鮮人民軍代表会議、道（直轄市）代表会議、省、中央および道党の機能を遂行する党組織の代表会議が開催された。

これらの代表会議では「朝鮮労働党と人民の偉大な指導者金正日同志を朝鮮労働党の総書記に推戴することについて」を討議し、金正日将軍を朝鮮労働党の総書記に推戴する決定書を全会一致で採択した。これは金正日将軍を党と革命の陣頭に戴き、全党、全軍、全民が党中

央委員会のまわりにかたく団結して偉大な領袖金日成主席の偉業、チュチェの革命偉業を完成せんとする信念と意志を反映したものであった。

全党のこのような一致した意思によって、30 余年の長きにわたり、不眠不休の革命活動によって朝鮮労働党を百戦百勝の洗練された革命的党に、全人民の絶大な支持と信頼を受ける不敗の党に発展させ、朝鮮人民を不屈の信念と意志をもった自主的人民に育て、この地に金日成民族繁栄の新時代を開いた金正日将軍は、チュチェ 86（1997）年 10 月 8 日、朝鮮労働党総書記に推戴された。

朝鮮労働党総書記である金正日将軍の指導のもとに、チュチェの道を力強く前進する朝鮮革命の偉業は、試練と難関を乗り越えて必ずや最終的勝利を達成し、朝鮮は統一された領土で 7，000 万の同胞が真の自由と繁栄を享受するチュチェの祖国として光り輝くであろう。

注　釈

〔1〕　**白頭山密営**　金日成主席が抗日武装闘争の時期に白頭山の密林のなかに設営した秘密根拠地。この密営は、1930年代の後半期から1940年代の前半期まで朝鮮革命の策源地であると同時に心臓部をなし、中核的な作戦基地、活動基地、後方基地であった。

〔2〕　**志遠**　「志遠大なるべし」という字義で、祖国と民族のためのたたかいの道に真の生きがいと幸せを求める革命的人生観であり、代を継いでたたかってでも必ず国の解放をかちとるべきであるという百折不撓の革命精神。

〔3〕　**『祖国のふところ』**　牡丹(モラン)峰に燃える　朝焼けなのか/大同(テドン)江にかかる　美しい虹なのか/朝焼けのように　美しい祖国のふところは/わたしが育ったなつかしい家　ふるさとなのです

　ツツジほほえむ　春なのか/ヒバリさえずる　空なのか/春のように　あたたかい祖国のふところは/わたしを育んだ　母なのです

　夜空に輝く　星なのか/海から差し昇る　朝日なのか/太陽のように明るい祖国のふところは/父なる将軍さまの

ふところなのです

〔4〕　**主体性の確立**　革命と建設で提起されるすべての問題を独自に、自国の実情に即して、自分の力で解決する原則を堅持すること。

〔5〕　**民青**　朝鮮民主青年同盟の略称。金日成社会主義青年同盟の前身。

〔6〕　**チョンリマ（千里馬）の大進軍**　経済と文化、思想と道徳の各分野ですべての後進性を一掃し、社会主義建設を最大限に促進するための全人民的運動としてのチョンリマ運動を展開する過程でもたらされた大進軍。

チョンリマは、一日に千里を走る馬という意味で、社会主義建設を急ピッチで進める朝鮮人民の革命的気概を象徴的に表わす言葉。

〔7〕　**李寿福英雄**　祖国解放戦争の時期、1211高地に連なる無名高地の奪還戦闘のさい、敵の銃眼をわが身でふさぎ、区分隊の突撃路を開いて戦死した18歳の朝鮮人民軍分隊長。

かれが遺したつぎのような手記が広く愛読されている。

「わたしは解放された朝鮮の青年である。

生命も貴い。輝かしい明日の希望も貴い。しかし、わ

たしの生命、わたしの希望、わたしの幸福、それは祖国の運命より貴くはない。

一つしかない祖国のために、二つとない命であるが、わたしの青春をささげることにまさる貴い生命、美しい希望、偉大な幸福はまたとない！」

〔8〕 **『朝鮮を輝かさん』** 朝陽（あさひ）のぼる　龍南山の頂に立てば/三千里祖国の山河胸に迫る/この地で金日成同志の思想を学び/朝鮮革命の主人となろう/ああ　朝鮮よその名を輝かさん

金日成同志を高く仰ぎ/チュチェの道を進みゆく/嵐も荒波もかきわけて/朝鮮の未来をきずきゆこう/ああ　朝鮮よその名をとどろかさん

世界に輝く太陽の偉業/代を継いでなしとげよう/チュチェの光宇宙にみなぎり/共産主義めざして進みゆこう/ああ　朝鮮よわが朝鮮よ

〔9〕 **チョンサンリ（青山里）精神、チョンサンリ方法** 朝鮮労働党の大衆路線を社会主義建設の新たな現実に即して具体化した大衆指導思想、大衆指導方法。1960 年 2 月、金日成主席が平安（ピョンアン）南道江西（カンソ）郡青山（チョンサン）里を現地指導する過程で創造された。

チョンサンリ精神の基本は、人民大衆の利益のために

忠実に奉仕し、人民大衆の生活問題に全面的に責任をもつ立場であり、社会の全構成員を教育、改造し、かれらを領袖のまわりに団結させて共産主義社会まで導いていく精神である。

　チョンサンリ方法の基本は、上級機関が下級機関を援助し、上部の人が下部の人を助け、つねに現地に出て実情を深く把握して問題解決の正しい方途を探しだし、政治活動を優先させ、大衆の創意を発揮させて革命と建設を進めることである。

〔10〕　**対人活動**　人びとを教育、改造して領袖と党のまわりに結集し、かれらが主人としての態度で革命課題の遂行に自発的に立ち上がるようにする党活動。

〔11〕　**昌城郡の模範的な経験**　金日成主席の現地指導によって、山地が全郡の 90％を占める山間部の郡で山を効果的に利用して畜産業と地方産業を発展させ、豊かで文化的な郡に変わった平安(ピョンアン)北道昌城郡の経験。

〔12〕　**テアン（大安）の事業体系**　1961 年 12 月、金日成主席が大安(テアン)電機工場を現地指導する過程で確立した社会主義経済管理システム。その基本は、工場党委員会の集団指導のもとに、経営管理において大衆路線を貫くことである。

〔13〕　**チョンリマ作業班運動**　作業班を単位にして勤労者を共産主義思想で教育、改造する活動と、生産での集団的革新運動を有機的に結合した大衆的大進軍運動。

〔14〕　**分組管理制**　協同農場各作業班の分組に一定の労働力、土地、生産道具などを定着させ、国家計画の遂行程度によって分配を実施して、農民を集団経営の管理運営に積極的に参加させる農業生産および労働の組織形態。

〔15〕　**革命化**　利己主義、個人主義などの古い思想を一掃し、集団と全体の利益を重要視する共産主義的思想・意識を高めることを意味する。

〔16〕　**労働者階級化**　社会の全構成員と経済、文化、思想と道徳などの各分野を労働者階級の姿に教育、改造することを意味する。

〔17〕　**パンチャン（傍唱）**　歌劇、映画、舞踊などの芸術で、主人公の内面世界やシチュエーション、ドラマの進行を舞台やスクリーンの外から説明し補足する有節歌謡形式の歌。

〔18〕　**種子**　作品の核をなし、作家が主張しようとする基本問題を内包し、形象の諸要素が根を下ろす下地をそなえている生活の思想的なかなめ。

〔19〕　**3 大技術革命**　工業労働と農業労働の差、重労働と軽労働の差を縮め、女性を家事の重い負担から解放するのが目的で、工業化が実現したのちに遂行すべき新たな高い段階の技術革命の課題。社会主義の完全な勝利を達成するための社会主義建設の戦略的課題である。

〔20〕　**祖国統一の 5 大方針**　北と南の軍事的対峙状態の解消と緊張の緩和、北と南の多面的な合作と交流の実現、北と南の各階層人民と諸政党、大衆団体の代表からなる大民族会議の招集、高麗（コリョ）連邦共和国の単一国号による北南連邦制の実施、高麗連邦共和国の単一国号による国連加盟を内容としている。

〔21〕　**思想的要塞と物質的要塞の占領**　社会の全構成員を共産主義思想と高い科学技術知識、文化水準をもつ全面的に発達した人間に改造し、生産手段にたいする全一的な共産主義的所有を確立し、需要に応じて分配が実施できるほど生産力を高い水準に発展させることを意味する。

〔22〕　**白頭の革命精神**　金日成主席によって指導された抗日革命闘争の時期に生まれた革命精神。万難に立ち向かう攻撃精神、信念をまげずあくまでたたかう精神、自力で国を発展させていこうとする精神を意味する。

〔23〕　**ヘルス・センター蒼光院**　各種の浴場、水泳館、遊泳場、理髪店、美容院、清涼飲料店などを完備した総合的な厚生サービス施設。

〔24〕　**チュチェ時代**　人民大衆が世界を支配する主人となり、自己の運命を自主的に、創造的に切り開いていく新時代を意味する。

〔25〕　**金赫、車光秀**　抗日革命闘争の初期、金日成主席に忠実であった青年共産主義者。

〔26〕　**「トゥ・ドゥ」**　金日成主席が初期革命活動期（1926年）に結成した「打倒帝国主義同盟」の朝鮮語略称。

〔27〕　**朝鮮民族第一主義の精神**　朝鮮民族の誇りと自負をいだき、朝鮮民族の偉大さを輝かしていこうとする自覚と意志によって発現される思想・感情を意味する。

〔28〕　**「鄭春実運動」**　郡内人民の生活向上に寄与した慈江（チャガン）道前川（チョンチョン）郡商業管理所所長鄭春実の模範を見習う運動。

〔29〕　**救援物資**　白米 5 万石（1 石は約 144 キログラム）、織物 50 万メートル、セメント 10 万トン、その他医薬品。